

大正二年二月五日發行

婦人と子ども

第十三卷
第二號

フレール會

第十三卷第二號目次

幼稚園の保姆

下田次郎

兒童救濟事業と婦人

小河滋次郎

幼兒と迷信

寺田精一

少女エヒー

岡田みつ

初生兒の爲の注意

石塚保吉

雜錄

失明兒教育の注意(東京盲學校)

附錄

美學講話(第一回)

菅原教造

本誌定價

一冊郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保脚紹介に關する件をも含む)の御手紙は

東京市小石川區久堅町七十四番地フレイベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、

雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下千駄

谷八七八倉橋惣三宛

大正二年二月二日印刷

大正二年二月五日發行

編輯兼發行者 東京府豐多摩郡千駄谷町大字千駄谷八七八

編輯兼發行者 倉橋惣三

印刷者 東京市本所區番場町四番地

印刷者 東京市本所區番場町四番地

印刷所 東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地

發行所 フレイベル會

婦人と子ども

第十三卷第二號

幼稚園の保姆

東京女子高等師範學校教授

下 田 次 郎

諸動物の母

母と云ふものは人間に始まつたものではないので、下等動物にも母といふものはある。併し魚の如きは卵を生み放しで、あとは自然に育つに任すので、母が子供を世話することはない。それで鳥などになると、卵を生んでそれを暖めて雛を孵す。孵した後も鶴なら鱒を採る事などを親がして見せて、子がそれに倣ふ、多少教へると云ふこともあらうと思ふ。獸類になると、乳を飲ませ、又保護することも、教へることも、鳥等よりは一層多く

なつてくる。人間になつて最も母は子供の爲めに骨を折るのである。胎内九箇月間子を宿して居る事からして容易なことではない、生れてからも鳥や獸をみた様に、早く獨立しないから非常に母の手がかゝる、母としての仕事は人間に至つて最も發達して居るといふことが出来る。

母の本能

併し下等動物から既に母はあるのだから、人間の母となる迄の母の用意と云ふものは、何十萬年か、何百萬年かわからない、古い時からあつたの

で、人間の母としての婦人の準備といふものは、實に根が深いものである。それで婦人は皆母の本能と云ふものを強くもつて居るのである。それは實際母となつてその本能が働くのみならず、既に子供の時から女の子にはそれが現はれて居る。人形を抱いて寝かせたり、冊いたりするのは人が人形を興へるからそうするといふばかりでなく、自然に人形を勞はるといふ性能が具はつて居る。婦人性の發揮は、母の本能の發揮といふ事を除いては完全ではないと思はれる。

女教師としての婦人

母としては勿論であるが、教師となつて母の本能を以て、母が子に對するやうな慈しみ、親切、温かきをもつて生徒に對さなければ女教師としての眞の特色を充分に現すことは出来ないと思ふ。女子を教員として、その存在を認める有力な理由の一つは母の本能を有すると云ふ點にあるであらう

と思ふ。母の本能の現れない女教員は、要するによい教員とはなれまいと思ふ。

生きた地藏菩薩

これが幼稚園の保母となると、その仕事は一層母の仕事に近づいてくる、小學とか、中等學校の生徒よりは、幼兒の内でも母の世話に多くなつて居るやうなもので、幼稚園に於ける保母は母の代理として幼兒を保育する精神がなくてはならぬと思ふ。先づ生きた地藏菩薩みたやうなものでなくてはいかぬと思ふ。かやうにして保母としての職務がよく勤まるばかりでなく、たとひ保母でなくなつても、保母たる時に盡した骨折り、幼兒を取扱ふことから得た思想、感情と云ふものは、生涯を通じて結構な寶であると思ふ。母である前に既に母であつたと云ふことで、我が子を教育するにも、非常に利益があると思ふ。獨逸では高等女學校を卒業してその上に二年ばかり、フラウエン、

シユーンと云ふ家庭の人となる婦人を教育する學校があるが、そこでは幼稚園の保育を必須科として居るのは大に理由があることと思ふ。日本でも女學校を卒業した補習科の生徒などには幼稚園の幼児を扱はしてみたならば、他日母となつた時に、餘程役に立つことと思ふ。先年此のことを高等教育會議に建議した議員もあつたが採用せられなかつたが、それはよい事と思ふのである。幼稚園の創設者フレーベルは女子の教員として適當なる事を信じ、女教員を養成することを必要とした人である。近くは獨逸のベルゲマンの如きも、男子に兵役があるやうに、若い婦人は必ず義務的に幼児の世話をさすがよいと云ふて居る。保姆を職業として居る人は職業に盡すことの效果の外に、保姆であつたことが後來とだけ母として、又婦人として利益があるかわからないと思ふのである。

幼児を預る所の必要

なほ少しく別事に涉るが、獨り幼稚園に於て幼児を保育するのみならず、勞働をする男女の幼児で、それが足手纏ひとなつて働けないやうな人々に、その子を仕事の時間だけ預つて世話をするといふ仕事も甚だ有用なことである。獨逸では子供預り所といふものがあり、佛蘭西ではクレージュといふものがあつて、乳呑兒から始めて、日中子供を預り。世話をする婦人が附いて居て、幼兒には乳を飲ませ、襁褓の取替へなどとして、幼兒には幼兒相當の遊びなどをさして、親が日中手足纏ひなく働かれるやうにして居る所がある。朝仕事に行きがけに、子供を渡して置いて、夕方仕事から歸る時に受け取るのである。日本にも少しは子供預り所もあるやうであるが、追々勞働する人間も多くなり、足手纏ひの子供も随分あることであるから、それ等の世話をし、保育をすることは甚だ結構な仕事であると思ふ。

保姆としての自覺

總てこれ等の仕事に従ふ人は一方精神上の養護者であると共に、一方身體の養護者でなくてはならぬから、看護のことも一通りは心得て居なくてはならぬ、幼児はまだ新鮮で、無垢のものであるから、それを預るものゝ影響は非常に強いものである。後年の教育よりも寧ろ幼児の保育の方が教

兒童救濟事業と婦人

(フレイベル會十二月例會に於て)

一
世が文明に進むに従つて生存競争がはげしくなり、社會に弱者が多くなり、種々の方面に社會的救濟の必要が起る。蓋し救濟事業といふのは弱者の保護の意味に外ならない。而して弱者といふに

育上には大切なことであるから、保姆は常に精神的に子供によき影響を與へることを務めねばならぬ併して常に修養を怠つてはならぬ。すべての職務をよく行ふにはこれに對する自覺が必要であるが保姆としてもその自覺を有することが必要である眞に自覺せる保姆こそは、又眞にその事業をよく行ふ人である。(文責記者)

法學博士 小河 滋 次 郎

も多くの種類があるが、幼児も亦一般的意味に於て弱者の一つなることはいふ迄もない。生物の中で人間の子供ほど生育に人の助けをかり、人の保護を要するものはない。其の保護を要する期間の長いことは動物の仔の比でないのである。殊に文

明の度が進んで、世が複雑になればなるだけ、此の期間が尙長くなる。昔は十四五才になれば、男女一家をなすなど、比較的簡單であるけれども今日では一人前になるまで保護を要する期間が非常に長い。普通健全なる心身を有するものでさへそうである。況んや貧兒、癆疾兒、低能兒等に於ては殊に多くの保護を要する。社會が其の弱者を救済する必要があるとならば、之等可憐の子供は先づ第一に救済せらるべきものである。言ふまでもなく子供は一家の後繼者、一國の後繼者で、一家一國の盛衰は實に兒童の肩にかゝつて居る。幼兒保護宜しきを得なければ一家一國の前途は憂ふべきことになる。しかも救済事業は其の効果のあるなしにかゝはらず、博愛心から起るもので、たとひ期待する程の効のないものであるとしても、情として之を實行せずには居られない。一體救済事業は何の方面に於てもなか／＼其結果を見ることの困難なものである。即ち養老事業、救療事業、窮

民保護、冤囚事業の如きに至つては、いはゞ手なくれの事業で、殆んど思ふ様には効のあらはれないものである。しかし徒勞と知りつゝ之れをなして居るのである。又せずには居られないのである。之れ等に較べれば、同じ救済事業でも、兒童救済は困難なると共に其効果の上に多くの希望を有したる事業であつて、世の中の爲に實効をあげ得るのである。即ち他の救済事業よりも第一にせられなければならない。限りある人と金とにて何の救済を先きにするか、何か最も効のある仕事をしようとならば、即ち第一に兒童保護をなすべきである。現に此の間も静岡の某の特志家が縣廳に金を献じて最も適當なる救済に用ひて貰ひ度いと申し込んだことがある。といふことを縣知事から聞いたから余は之を是非兒童保護の方面に用ひる事を勧めて置いた。

救済事業は世間の流行になり易い。事業の實際の必要、適切な効果の有無を考へてするよりも、

流行につれてするといふ風になり易い。其爲に必要上の前後を誤るようなことも起る。殊に此頃は流行の様に感化院、出獄人保護等のことが諸方に行はるゝ。之等も必要なことには相違ない。出獄者を保護し衣食の道をたてゝやることもいゝことには相違ないが、犯罪者の如き多くは本來の悪人で之を感化して眞の良民にすることは中々六かしい。それよりも先づ吾人の最も同情を與ふべきは寧ろ犯罪者にあらずして其の家族である。彼等は罪なくして盜賊の家族よとそしられて、其日の糊口の道をも失ふて居るのである。世に最も氣の毒なものである。又犯罪者當人の將來の爲にも家庭を救つてやることが有効である。一家離散の犯罪者を改むるには之を迎へるそのホームをよくしてやらなければならぬ。殊に近來宗教家が團結して之等免囚を寺院に引きとり保護する方法をとつて居るが、之は非常に場所を誤りたる事と思ふ。寺院は昔から教育の大切なる機關である。今も子

供の遊び場として尙一種の兒童保護機關の用をなして居ることが多い。即ち寺院は益々兒童の教育的方面に活動せられべきものである。元來此神聖なる幼兒の爲めに用ひられるべき寺院が免囚保護などには力を入れて、兒童保護には何の働きもしないといふのは甚だ事を顛倒せるものである。

二

世の開けるにつれて人口が増加する。我が國も出産數が年々に増加するけれども、死産多きことも亦世界無比である。一年百五十四萬の數にのぼる出産との率が千分の九十四で約一割にあたることになる。全世界中で一番である。獨逸などは六百四十萬即ち千分の四十六の割に過ぎない。其の上我國は死産が多いのみならず、初生兒の死亡率が非常に多い。且つ年々増加する傾向がある。獨逸も多かつたけれども、其方面に注意してから年々減少して居る。そして今では我が國の現在と稍伯仲の間にある。獨逸は年々減少するに、我國は増

加しつゝあるのである。數年を出でずして世界第一となる虞れがある。こんな事で世界一等國は有り難くない。而して死産者や初生兒の死亡率の多いといふことは、一面には生存するものも健康でないことを證明して居ることになる。現に壯丁の健康も死亡率多き地方にては弱く、少き地方のは強いのが事實にあらはれて居る。而して我國では次第に壯丁の健康が衰ふる傾向がある。いつ迄も此まゝならば國家の前途憂ふべき至りである。今日は強兵を以て任じて居るけれども遠からずして貧國弱兵となり一等國の名をとすに至りはずまいか。而してこれ皆兒童保護に注意しなかつた報といふべきである。

三

エレンケイは二十世紀は兒童の世紀だといったが、實際此の世紀に於て世界の兒童保護の方面は大に進んだ。而して我國は如何であろうか。外國人からきく所によれば、外人は日本をさして兒童

のバラダイスだと言つて居るそうである。兒童保護をするには日本にならふべし、露國に勝ちたるもこれがためだなど、言つて居るそうである。併し之は飛んだ買ひ被りで、皮相の觀察である。勿論我國の中流以上、上流ではその家の子供を大切にし、その爲めにうきみやつし、いかにも子供に盡して居る。外國で、子供は母親の懷に抱かるゝ事少く、召使からは呼びづてにされ、親の外出にも伴はれないといふ風など、比べると如何にも子供が大切にされて居る様に見える。實際我國の家庭はその家いなかの子供の爲によく世話をする風があつたのである。處が今日では上流に於ても此の類が次第に減じて西洋にかぶれ、子供を乳母にまかせたり、母乳を用ゐずに牛乳を用ふるといふ様になつた。

即ち我子の世話を家庭でせず他に托すといふ風が増して來た。我國今日の幼稚園の繁昌も或る意味に於ては之れが因をなして居るとも見られる

然るに今日の時世が要求する幼稚園なるものは純教育的意義よりも救済的意義に於て活動して貰ひ度いのである。然るに斯くの如き有様であつては日本に於ける幼稚園の増加は兒童保護の盛なるを證するのでなくして、上流社會が家庭教育に不熱心なことを證して居るとも言はれる。農民其他眞に保護を加へる必要のあるものは全く其恩恵を與へられず。下層社會の兒童は全く社會から認められて居ない。之れでは子供のバラダイス處ではないのである。

彼の貧しい労働者の子供等はたかく身體の自由なる老人にまかされ、又は全く守る人なく投げやりにせらる居る。又學齡の幼者でありながら終日工場で働いて居るものあり、行商するものあり、親の仕事を早朝より夕方まで手つだふもあり、尙甚しいのになると、生れると直ちに養育料寧ろ實は埋葬料を附して冷い他人の手に渡されるもある。實際世間には養育料をあてにする悪婦や毒婆

がある。かゝる連中は料金が目的であつて、養育が目的ではない。遂には残酷な結果にして仕舞ふ。新聞でかゝる記事を見ることが往々あるが、それは實際のほんの何分の一が新聞紙上にのぼるのであつて、その何倍も何倍も斯くの如きことが社會の裏面に行はれて居る。しかして我國にては不幸の手に陥る兒童の爲に何等の救済方法も具つて居ないのである。孤兒院養育院の如き方法機關は多少あるけれども、其の内容に至りては甚だ整つて居ない。甚しいのは乞食を養成する場所だか又虐待する等の所だか分らない様なのである。幼兒を寄附金募集の爲の樂隊に出したり、また葬式に出して寄附を受けさせたり、其の内容全く救済の實のないものが多い。又貧兒の爲めに夜學校を建て、やつて居る處などもあるが、其の内容に至つては之亦兒童虐待としか思はれない。嘗て大阪でみたのに、夏期狭き暗きあつき室に多數の兒童を集めて教育して居たが、その三分の一は半睡、半

數は熟睡して居た。その熟睡して居るのは多くは朝早くから夕おそくまで工場で働き、身體は麻の如くにつかれて居るのである。その疲れた眼を以て讀書するのは子供等には無比の苦痛なのである。之れでは親切か虐待か分らない。教育の上に多少でも保護の意味を加ふることを考へるならば、斯かることは出来ない筈である。

斯くの如く我國では保護事業其の當を得ない爲に不良少年は年々増加し犯罪者は八萬人にも及ぶといふ有様である。英國はその數僅一萬四五千に過ぎない。而して我國が斯かゝる状況になつたのは一つに兒童保護の方法を怠つたのが原因である。ビクトルユーゴは兒童救濟の機關が出来れば其の結果として一二ヶ所の監獄を閉づることが出来ると言つたが日本にも眞の兒童救濟事業起らば、犯罪者の減少すること難くない。

四

兒童問題は救濟事業の出發點であつて又中心で

ある。即ち國家の事業とせらるべきものである。ハンガリーやデンマークでは兒童保護の全部を國家が負擔して居る。其他の諸外國も次第にかゝる傾向がある。日本にても漸々其の方向に注意せられて來て益々發展をみるべく、又そうならなければならぬが、併しその眞の發展の爲には先づ何よりも人を待たなければならぬ。經營の任に當る適當の人がなければ仕事の成績はとても擧らない。これ常に苦心する處である。凡て救濟事業にありては原動力となる、最も大切なるものは、慈愛心である。之れなくては何も出来ない。而して婦人は愛の權化である。獨り家庭の守護神となるのみならず、社會救濟事業の擔任者となる自然の自分が有して居る。殊に兒童の救濟は婦人の手によるが自然である。又一體貧乏の原因は収入の問題よりは支出の問題である。収入を適當に使用することをしないからである。而して支出の下手なるは家庭の家婦の無智によるのであるが所謂貧民の家

婦は多くは支出經濟の法を知らない。貧民救濟の根本は彼等に支出の道を教へてやるにある。而して之れ亦婦人が適任である。即ちいろいろの方面から見ても救濟事業の事實上の中心は婦人の力に待たなければならぬ。

五

救濟事業に婦人が主となるは、事業の上には有益なるのみならず、婦人の天分として其の修養に在るのである。かゝる事業にたづさはりて其の品位を高め精神上得る處あると共に、また身體上の健康を得ることが出来る。教育ある婦人方が卒先してかゝる事業に盡されんことを希望にたへない。そして弱者の守護神、社會の守り神としての模範を示され度いのである。外國では上流の令嬢夫人方が此の方面に献身的に活動さるゝこと大いに感心する次第である。日本にては愛國婦人會、赤十字社、其他救濟事業に關係する婦人は多くあるが其爲に自ら手をくだすことを知らない。いつも白

襟紋附主義で、實際手を下して幼者弱者の世話をしたことをきかない。外國に比して甚だ遺憾の事である。

どうぞ良妻賢母といふことを狭き家庭の上のみならず、廣き社會の上にも擴張して、社會の爲に其の幼者等の救濟の任にあたつて頂き度いものである。

終りに一言申さんに、外國にては、婦人が之等の事業の中心となりて、院長幹部となりて働くものが多い。昨年冬ベルリンの講習會に出席した時も講習生の大多數は婦人であつたのには實に敬服した。我國で斯ういふ會合のある時には婦人の影の見たことが滅多にない。先般内務省で催した兒童保護問題の講習の折にも、百五十人中女子僅か四五人に過ぎなかつた。こういふ有様ではないと思ふ。由來救濟事業の原動力は、一金力、二信仰、三慈愛である、即ち一金滿家、二宗教家、三婦人であつて、この三つは救濟事業上の三尊稱

である。協力一致して活動して貰はなければならぬ。而るに吾が國では此三尊いづれも眠つて御座る有様である。どうか此の三尊の一つたる諸君

が此の方面に其活動せらるゝことを希望に堪へないのであります。(講演の概要、文責在編者)

幼 兒 と 迷 信

文學士 寺 田 精 一

幼児の周邊にある人々の態度や言語の忽にすべからざること、今更喋々の必要はない。茲に述べんとする迷信の如きものも、普通の家庭生活に於ては、左程に注意されぬ場合が多いけれども、迷信が色々な關係よりして、幼児の若々しい精神に影響して、永く後來に思はしからぬ結果をまねくことのあるは、一考しなければならぬことである。

幼児の迷信は、其殆んど全部は他より教へられるものであつて、自ら或事實に遭遇して、一つの誤られたる信仰を得るに至るといふことは、殆ん

どないと観てよい、何となれば彼等に於ては、一つの事實を経験すれば、それを其儘一つの経験として取入れて、未だそれに對して思考を回し、其結果一つの信念を得るといふまでには、發達して居ないからである。而して幼児に迷信が教へられる場合には、二つの異つた場合がある、即ち一は教へる人が全く信すべき事實として、迷信を教へる時、二は教へる人は全く迷信たることを知れども、それを聞き入れた幼児は、これを一つの信すべき事實となす時である。

教へる人が迷信とは知らないで、幼児にそれを

教へるのにも、色々な場合がある。自分は迷信ではない、眞に信すべき事實であると思ふて、かくかくの場合には如何にしなければならぬとか、この事實はかくかくのことより、必然に起ることであるとか、不思議のやうに見えるけれども、確にあることであるとかいふて、固く自ら信するが故に、これを他の人々にも強ゆるのである、従つて親切心から家庭の幼児にもこれをいひ聞かせて、之れ等の事實を眞のこととして信せしめるのである。

固より迷信といふことは、智識の多寡、年齢の如何で定まるものではない、相當に新しい學問をした人であつて、世上の事柄に對しては、正確に判斷をなし得る人でも、往々にして思ひも寄らぬ迷信に捕はれて居る人がある。又中には年齢も若く、教育も左程受けないのに、所謂迷信のことには一向注意しない人もある。けれどもこれを大體よりいふ時には、常識の狭い、教育程度の高か

らぬ人に於て、迷信の多く行はれるのは、争はれざることである。又同じやうな境遇の人であつても、其人の個性に依つて、迷信に陥り易い人と、然らざる人とがある、かの感情性の人の如きは迷信に至り易いのであるが、尙或偶然なことから、迷信に入ることが甚だ多い。

何れにせよ迷信なる事實は、社會上非常なる勢力を有して居つて、これを信する人々に向つては、批評疑惑の餘地は更にはないのである、従つて是等の人々が幼児に對する時には、幼児が全くこれを信じなければ安んせぬのである、かくて家庭の中に一人の迷信家があると、其家の子供は知らず識らず、其迷信を信じて、彼等の精神の一部分をなし、日常の行爲もこれに依つて支配される、ことが、少なからぬやうになるのである。尤もその迷信家が、幼児に向つてそれを信せしむるやうに努めな場合であつても、其人の迷信は或は言語に於て表はれ、或は舉動に表はれて、幼児の模倣の對象

となり、未だ其人の言語を理解し、其舉動を判断する程の發達をなし居らざる幼兒は、只かゝる時にはかくすべきもの、かゝることは眞實のこととして、自然の間にそれ等の迷信が、幼兒の精神中に形成さるゝことも少くないのである。

次に幼兒に接して居る人は、迷信であるといふことを知つて居るに拘らず、これを幼兒に教ふるといふ場合であつて、それには此の種々なるものがある特別な動機はなくて、迷信たる事實を教ふる時、自からは迷信であると知つて居るから、一笑に附することであるけれども、何等かの序に話し、又は教ふるといふが如き場合である。

迷信たる事實に面白味があるので、幼兒を喜ばす爲めに、語り聞かすといふ場合である、全然あり得べからざることや、不思議な事實を誠しやかに語り聞かす時には、幼兒に假令これは本當のことではないと、豫め斷つて置いて、暫く聞いて居る間には、本當のことと思つて、一心に其先を

尋ねるやうになるのである、殊に空想的な事實に興味を持つ時期の子供であると、一層此種の話を喜ぶものである。

幼兒があまりもしないことを聞いて、恐ろしく思ふのを以つて、或は面白いこととし、或は一時の方便から威嚇するといふやうなことが、多くの家庭などによく見られる事實である。而して又幼兒の方に於ても、一種の好奇心から、恐ろしくはあつても、これを聞かして貰ひたいのである、かくて家庭のまといには、時々妖怪談などが持て囃されるのである。又叱責する爲めに狐や狸を以てすることも甚だ多く見られる事實である。

迷信が幼兒の精神上に及ぼす影響を考ふるに、迷信の内容性質に依つて、色々異なるものと観なければならぬ。即ち迷信たる事實が、特別に深い印象を與へるやうなものでなく、却つて日常生活の上に、よい影響を與へるやうなものであれば、其迷信は少くも悪いものとはいへない。け

れども迷信たる事實が、非常に幼児の精神を刺戟するやうなものであつて、永く強い印象を残すやうなものである時には、大に注意をしなければならぬ。元來幼児の時期は盛に精神、身體の發達する時であるから、出来るだけ無理な内外の束縛を離れて、發達せしめなければならぬ。然るに迷信などを以て彼等の日常生活を束縛せしむることは、決して好ましいことではないのである。

迷信の中にて、吾人の日常生活を色々に束縛するものが少くない、かくかくの日にはかくかくのことはしてならぬとか、どの方角に向つては氣を附けねばならぬとか、朝何等かの出來事があつたならば、其日には何も企てゝはならぬとかいふやうに、様々な事實に超自然的の因果關係をつけて、日常行爲の軌範として行く類の人がある、それも自分一人にてそれを實行すればよいのであるけれども、かゝる種類の人に限つて、決して自分一人にて満足しない、必ずや自分の一家の人々に

實行せしめなければ、心の安んじない人々である、勿論何事も解しない幼児などにも、これを當嵌めなければ承知しないのである。其迷信を神聖な事實として信じて居る人には、それでなければ甘んずることが出来ないのであるが、全く此の方面の事實を一笑に附し、何等の權威をも認めぬ人にとつては、此上もなく迷惑な窮屈なことである、況んや何事も知らない幼児に於ては、何故に自分が思ふまゝに出来ないのか、自分の行動の束縛される理由を解せずして、然かも遂には此迷惑な窮屈な掟を守らなければ居られないやうな、一種の強迫觀念を形成して、成長してからまでも、其人の行爲を支配するやうになることが、決して稀有のことではない。

而して迷信は右の如く、吾人の行爲を束縛するやうな性質を持つて居るものが多くあるが、それと共に一種の恐怖心を伴ふが如き、種類のものも甚だ多いのである。幼兒は狐が恐ろしいとか、狸

が恐ろしいとか、幽霊が恐ろしいとかいふことを、生れながらに知つて居るものではない、けれども泣く時や、いふことを聴かぬ時に、狐や狸が来るといはれ、幽霊が出るといはれて、泣きをやめ、大人しくなる所以のものは、幼児の近くに居るものが是等のもの、恐ろしいことをいひ聞かせ、如何にも恐ろしいやうな態度をして見せるものから未だそれ等を一度も見たことのないのに、只此上もなく恐ろしきものと、思惟してしまふのである。而してかの叱責の方便として、かゝる種類のものを用ひ、威嚇し恐怖せしめて其目的を達しやうとするのは甚だ其策を得たるものではない、かくの如く威嚇や恐怖に、迷信的のものを持ち出して幼児に對するのは、最も注意をしなければならぬことである。

殊に如何に幼児が興味を有するからとて、恐怖を伴ふが如き迷信的事實を以てするのは、宜しからぬことである、よく幼児が話の終つた後に、一

人にては睡につけないとか、廁へ行けないとか、夢に驚かされるゝとかいふことが見られるのである、よしかくの如き具體的結果の見られない場合でも、決して彼等に好ましき影響を與へて居るとはいはれない、必ずや其精神中に、よからぬ印象を受けて居るのは、明かなことである。次に幼児の恐ろしく思ふのを面白いこととして、恐怖を感ぜしむるが如き、迷信的事實を話す如きことは、心ある人のすべきことではない。元來恐怖は其表はれ方に於て見るも、極めて消極的のものであつて、發展的な、元氣を添えるやうなものではない。幼児等がかゝる恐怖的事實を聞かんと欲するには、種々なる原因もあらうけれども、多くは好奇心に因るものである、決して心から落付いて、楽しんで聞くといふものではない、さればかゝる方面へは、なるべく話頭を轉じないやうに努めなければならぬ。それを只子供等が聞きたがるといふのを以て、大人が聞いてさへも、恐怖を催すが如き事

實を、自己の一時の興に任せて、幼児に語るといふが如きは、謹しむべきことである。

而して最後に一言すべきことは、幼少の時に受けた深い印象が、後に其人の一生を通じて、其人の行爲を多少に拘らず支配することのあるは明かなことであるが、この迷信の如きもの、場合に於ても、成長して後に意識的に其影響して居るのを見ることがあるが、又無意識的に影響して、自分では何故に思ふ通りに行動が出来ないかと疑ふこともあるのである。されば幼児の時に聞いた色々な迷信的な事實は、常識が豊富になり、知識が多くなるにつれて、其全く迷信たることが知られ、其不可思議であると思つたことや、恐ろしいと思つたことなどは、何れも根據のない虚空なことであると思つて一笑に附するも、然かも其心の奥には、尙全く取去ることの出来ない、或もの、存することが少なくない、即ち理論上では何の事でもないのに、實際の上に於て、日常の行爲の上

於ては、矢張り幼児の時に受けた、迷信的事實の印象が關係して居つて、どうしてもこれを取去ることが出来ないといふことは、決して珍らしいことではないのである。

かくの如くにして或種の迷信は、若々しい幼児の腦裡に、深い強い印象を永く留めて、つまりぬ迷信であると知りつゝも、然かもそれに自己の行爲が支配されて、一生の間其人の性格に關係を斷たないで、存在するのである。前にもいふた如く、此關係は自覺的に知つて居ることもあるけれども、全く自らは其關係を知らずに次第に此印象が其人の精神に影響して、漸次に性格を變化せしめ、又は自らは迷信と知つて居つても、内部の印象は尙ほそれを肯んせないで、依然として其人の精神作用に關係を有して居るといふこともあるのである。されば幼児と迷信、殊に恐怖を伴へるが如き迷信は、最も注意を要すべきものと云はねばならない。

少女「エピソード」

——エリオットの傑作「サイラス・マーナー」中の可憐の少女——

東京女子高等師範學校教授 岡田 みつ

「エピソード」はエリオット(G. Elliot)の作「サイラス・マーナー」(Silas Marner)といふ小説の中に現はれて居る少女である。此の無邪氣な少女が世を恨み人に背いて居た「マーナー」の頑な心を不知不識の裡に和げるといふのが此の小説の筋の一部である。

扱無心の子供が如何やうの心の人に感化を及ぼしたかといふに、先「サイラス・マーナー」といふ男の半生を、大略述べなければならぬ。サイラスは十九世紀の初、英國の片田舎に機織を業としてゐて信仰心の厚い若者であつたが、二なき者と信じて居た親友に謀欺たはかられて、教會の金を盗んだとの濡衣を被せられた。「サイラス」は無實の罪を長老

達に訴へたが、其教會の習慣として、事實の真相を探るに、法律の手續に頼らず、嫌疑を受けた人が神の前で鬪を引き、之で罪の有無を判決するのであつた。あはれ「サイラス」は有罪の鬪を引きあてた！心に省みて疚き處なき彼は、人は信せずとも、神明は見をなはずと頼んだ事も徒あだとなつて、盜賊の汚名を受けた。其結果として婚約のあつた婦人には捨てられ、知己朋友に見放されて、彼は世を咒ひ神を怨んで、終に人知れず故郷を立ち去つて仕舞つた。

「サイラス」は「ラブロー」といふ小村に移り住んで、十五年を経過した。彼は村外れの小屋に獨居して、朝から晩まで機を織つてゐた。村の酒屋で

一杯の酒を傾けるでもなく、隣人の許へ立寄つて無駄口をきくでもなく、織物の注文を受けるか、必要の品を購ふ外には、絶えて人に物言ふ事もなかつた。ましてや我家に人を請じるなどの事は更に無かつた。其でなくてさへ、村人は他國者よと疑ひの眼で彼を見るのに、此のやうな風ではあるし、顔といへば蒼白で、眼が近眼の出目でめで、しかも時々四肢強直して失神する病があつたから、村の人は誰も恐ろしい無氣味な人だと思つてゐた。

それでも、靴屋の妻が急病に苦んで居るのを見て、「サイラス」は、此女に自分の心得て居る藥を與へて、忽ちにその苦を和げてやつた事があつた。之を縁に、彼は村人と交はり、元の人間に戻れば戻れたのを、迷信の強い村人が「サイラス」はお呪ひで病を癒す術を承知して居ると言ひ囃して、乳の出るやうにとか、百日咳を療治してくれとかいつて、金までも持參して、續々頼みに來たので、律義の「サイラス」は、偽りを以て金を儲けやうな

どの心は徹塵もないので、咒なんぞは知らぬくとブリ／＼腹を立て、斷つて仕舞つた。人々の方では意地悪い男だと思つて、其後は病氣や不慮の災に遇ふと「サイラス」に疾視された爲だなど、言つて、彼と村人との間は尙更遠ざかるのみで、彼は全く孤獨の生活を營んで、樂みもなく考もなく一個の機織機械と成り果てた。

かくて居る事十五年、彼の身にとつて唯一の變化は、徐々に金が溜つた事であつた。獄裡の人が壁に線を引いて時を劃して、心遣りとした果が、その線の増すのを何よりの目的とするやうになつたと云ふ如くに、「サイラス」も自然に積もりかけた金を、今はそれを殖さうとの念が、まづ先に立つやうになつた。彼はなる可く餘計に働いて、成る可く費用を少くして、成る可く餘計に蓄へやうと心掛けた。機臺の下の床の煉瓦を上げて、鐵の壺を据えて、其中に金銀貨を納めて置いて、夜になると其を取り出して、數へたり觸さわつたりして、

渴した者が水に對したと同じ心で、其格好や色を眺めた。彼の生涯は唯織ることゝ、溜めることとの二つの職務と成り終つて、その先は如何するといふ考は少しもなかつた。彼の腰は曲つて顔は萎びて黄色く、未だ四十歳にならないのに、子供等は「マーナー」老爺と呼ぶやうになつた。見掛けは實際怪げな、哀れな、無氣味の人であつたが、さて此男位好人物は無いので、貪欲ではあつたが人を害ねやうなどゝの念は皆無で、彼は信仰の光は消え愛情も枯れたので全力を擧げて稼業と金とに絶り付いてゐたのである。

かくてラブロー在住十五年目の暮に、第二の大變化が彼の身の上起つた！彼が一夜入口の戸に締りをせず村へ用達に出たその間に、壺中の金は何者かに盗まれてしまつたのである！

哀れや「サイラス」は、茫然自失して爲すところを知らなかつた。杖と頼んだ支柱が折れて、最早依り頼むものがなくなつた。機臺は依然としてあ

つた。織り掛けの布も其儘にあつたが、足の下の寶は既になくなつた。數へたり觸つたりする樂みもなくなつては、夜も詰らなくなつた。いくら稼いだとて、少し許りの賃金は、手にする丈思ひ出の種であつて、その塵から積り／＼て山とする迄の辛苦を想像するに堪へなかつた。彼は唯嘆いて空漠の時を充たした。機臺によつて仕事を爲ながらも呻吟き、ポツ然と火の前に座つて、頭を抱へて聲低く呻吟つてゐた。

が却てこの不幸は、人々の「サイラス」に對する嫌疑の念を薄らがしめた。彼を狡猾の恐ろしい奴と計り思つて居た村人も、自分の物をさへ始末の出來ぬ哀れの者だと云ふやうになつて、物を呉れたり、言葉を掛けたり、慰めに來たりするものが追々出來て來た。

大晦日の夜のことであつた。近所の人は「サイラス」に戯れ半分に「今晚は起きて居て、徐夜の鐘を聴きなさい。運が向くといふから、紛失した金

が戻るかも知れない」と云つた。「サイラス」は夕景から幾度か戸を明けて外を眺めたが、降りしきる雪で遠くも見えないので、直に閉めて仕舞ふのであつた。最後に戸を開いた時は、雪は止んで、雲にも途切れが出来て居た。「サイラス」は暫時耳を澄してゐたが、體々たる天地の寂寞に打たれて、心の奥迄淋しさが染み込むので、ハタと戸を閉ぢた、……が實は閉めやうとした瞬間に、「サイラス」は例の四肢強直の病に罹つて、彫像の如くに見えぬ眼を見張つて、立ち竦むでしまつた。

「サイラス」はやがて我に歸つて、閉め掛けの戸を閉めた。自分には其間に何事も起つた感じがなないので、寒氣が身に染みるなど、思つて、爐火の許に戻つて、薪を直さうとすると、爐前の床に黄金とも見ゆるものがあつた！不思議に盗まれたあの金が、不思議に戻つて來た！と彼の心臓は烈しく鼓動し、手を伸す力も無かつた。見る／＼金塊は光を放つて大きくなるやうだ！やつと身を屈し

て彼は手を差し伸すと、ヤ、手觸りの堅い、手馴れた金貨でなくて、柔かい暖かい毛髪であつた。彼は愕然として其處に膝を突いて、熱と見れば、丸ツばい、色白の幼児が、金色の髪の毛を散らして眠つて居た！昔死んだ小妹が夢に現はれたのか知らん？夢であらう？「サイラス」は枯葉や枯枝さし焼べて、火を盛にして祝たが、幻は消えないで、丸ぼちやの子供の姿と、見すばらしいその衣服とが分明と見えた！

やがて子供は目をさました。抱き上げる「サイラス」に縋り付いて、マ、／＼と云ふので、「サイラス」は我知らずやさしい聲を出して、すかし宥めて、粥に黒砂糖を加へて食べさせたり、這ひ廻る後を危み／＼追ひかけたりして、少時は萬事を忘れてゐた。少女は足が痛むといふらしく、靴を引張つて泣顔をするので、「サイラス」の鈍い心にも其と心付いて脱がせてやると、その靴が濡れてゐるので、幼児が雪の上を歩いて來たといふ事に

始めて氣が付いた。そこで子供を抱いて戸外に出て雪の上の小さい足跡を頼りに叢の傍にゆくと、子供はまたマ、〜と呼んだ。見れば其處には半身雪に包まれて、叢に頭を埋めた人の死體があつた！さてこそこの幼兒は、凍死した母親を離れて「サイラス」の家から漏れた火光に誘はれて、彼の家へと迷ひ入つたのであつた！

「サイラス」は凍えたる人を救はうと子供を抱いたまゝ、村の豪家を指して急いだ。丁度夜會の最中で男女の客が集まつてゐる部室へ、ノツツリと「サイラス」が顔を出したので、「何しに來た？」「エ！女が雪の中に死んでゐる！靜かに〜！今すぐ醫師を遣るから」など、男の人等にコン〜云つてゐる中に、婦人達は聞き付けて、愛らしい子供の傍へ寄つて來て「オヤ何處の子？」「雪の中に仆れて居るといふ人の子でせうよ」「そんならマーナ！殿その子を此處へ置いて行きなさいと云はれて「サイラス」は「どうして〜私の手から離すわけ

には行きません。私の處へ來たのですもの、私には権利があります」と思はず叫んだ。此の子をどう仕やうとの考は今迄はなかつたのだが、手放せと云はれて急に出した今の言葉は、「サイラス」に取つても意外の發見であつた！子供は輝く燈火や笑みこぼれてゐる婦人達に、氣を取られてゐたが、其にも飽きて、マ、〜と泣き出した。それでも「サイラス」にはしつかりと嚙^かり付いてゐた。かういふ風に「サイラス」は、失つた黄金の代りにこの子を天からの授りものゝ如くに得た。否「サイラス」は黄金がこの子供になつたのだとさへ信じた。

(未完)

○本會總會

例年の通り、本會總會を四月東京に於て開催いたします。昨年は珍らしい盛會でありましたが、今年は一層盛に有益な會にしたと思ひます。幹事の方でいろいろ計畫中でもありますが、會員諸君の御熱心な贊助を切望いたします。いづれ來號の本誌上に詳しく御案内いたす積であります。全國の會員諸君が多數來會下さるよう致し度いものであります。

初生児のための諸注意

醫學士 石 塚 保 吉

初生児といふのは、生れて間もない子供のこと
で、生後何日迄といふ定めはないが、先づ分娩後
一二週間位迄の子供を初生児と云つて差支へない
のであります。併し今お話しやうとするのは嚴密
な意味の初生児でなく、只生れて間もない子供に
就てのことであります。

(1) 初生児は弱いものである

胎児が母親の體を離れて世の中に生れ出るとい
ふことは、其の子供にとつて非常な變化で、其の
時の有様は丁度暖かな家庭の中に育つて、親兄弟
の愛の懷で抱かれて、衣食住すべて何の心配もな
く平安に養はれた子供が、俄かに世の中に出て來
たやうなものであらうと思ひます。その時に周圍
の人が親切に色々な事を導いてくれるといふやう

なことがなかつたならば、そういふ子供は一人世
の中になつてどうしていゝかわからない。それと
同じことで初生児も今迄は母親の胎内にあつて、
生活に必要なものはすべて母親から供給されて、
自分は只完全に母の體に寄生して居りさへすれば
よかつた。然るに分娩して世の中に出て來ると三
つの大きな仕事を自分でしなければならぬこと
になるのであります。三つの仕事といふのは、第
一呼吸をすること、第二營養物を自分でとつて自
分で消化して行くこと、第三外界の氣温に對して
自分の體温を保護することこれだけであります。
初生児が呼吸する空氣は母の胎内で、母から供給
されて居つたやうに行かない、即ち温度は冷たく、
烟や瓦斯の様な不純物が混つて居る。營養物は胎

中にあつては必要だけ供給されたのであるが、生れてからは自分で乳を吸はねばならぬ。そして分量が丁度よいだけでなかつたり、乳の性質が變つたり。時間が不規則になつたりして、消化器を苦しめる場合も多くある。體温を維持する事は勿論自分には出来ないから看護者からして貰ふのである。そればかりでなく、斯ういふ大切な仕事をする機關、即ち呼吸器、消化器、皮膚等は此の時代には誠に弱いもので、我々の考へ及ばない様な變化がよくあるので、それが基となつて病氣を起したりする。病氣になると中々癒りにくい。斯ういふわけで、極くつまらぬ事のために貴重な生命を生れたばかりで失つてしまふ場合が甚だ尠くないのであります、統計に據ると、初生兒の時代は一番病氣に罹ることが多く、死亡する事も最も多い。

毎日二百二十一人といふ實に驚くべき數を示して居る。それ程弱いものであります。私が近頃出遇つた例を申すと、一人は昨年暮、あの雪の降つた寒い日に母親に負ぶさつて母親は家の外で働いた。それが因となつて急に肺炎を起して三日たゝない間に亡くなつた。一人は母親が寒い晩に町の湯に連れて行つたその晩から病氣になつて翌日はもう亡くなつた。どちらも一ヶ月未満であつた。今一人はやはり昨年の冬母親が遠い所の知人を訪ねる時に負ぶさつて行つたので、肺炎になつて死んだのである。斯ういふ例は實に澤山あります。それ故初生兒の取扱ひは注意の上にも注意をしないと、一寸した事から恐るべき結果を惹き起すのであります。

○着物よりも寒い空氣に注意せよ

前の三つの場合を考へると、皆寒い空氣を呼吸した爲めに起つた病氣である。親達は皆着物を澤山着せて温かに負ぶして行つたとか、あんまり寒

い晩だからお湯に行つて暖めてやりませうと思つたといふ。澤山着物を着せても、お湯で暖めても寒い空気が氣管に入るのを防ぐことは出来ない、いくら暖くしてやつても寒い處に連れ出すと忽ち氣管を痛めるのである。こんな事はわかりきつた事だが實際に於て注意されないのであります。

○營養は母乳に限る

呼吸器が弱いやうに、消化器も亦非常に弱いものと思はねばならぬ。營養品に僅かばかりの變化があつたり、少し分量や溫度が違つたり、又は時間が不規則になつたりすると、大人には何の障りもないことでも、初生兒の消化機關には直に影響するのである。斯ういふ時代の人工營養といふことは最も危険が伴ふのであります。一體人工營養は何れの時代でもあまりよくはないが、少し成長した子供ならばそれ程害は起らない、併し少くとも生後三ヶ月間は母乳で育てたいのである。母乳は初生兒の營養品として最も完全で、これに勝る

ものは何にもない、そしてよい營養品といふばかりでなく、この時代に起り易い營養障害、消化不良の豫防としては是非とも母乳を與へなければならぬのである、人工營養品は何を用ひても又どんなに注意しても、それが初生兒の腸胃に叶ふて消化不良を起さないといふことは殆んどない。此の頃に起つた營養障害はなかなか癒り難いので、遂にはその爲めに斃れることも少くないのである。癒つても發育を妨げられ、後々迄も影響が及んでその子供は一生健康を害ねるやうになる。斯ういふ次第であるから最初の營養は是非共母乳を用ふるやうにし、若し母乳が少ない場合には、出来るだけ母乳を廢さないで、母乳の傍ら外のもので補ふか、又は乳母を雇ふことにしなければならぬ。母乳の營養にしても時間を正しくすることは非常に大切で、どんなによい食物でも分量が過ぎると必ず消化不良を起すのであるから、母乳だからと云つて不規則に與へることがあつてはならない。

○臍の取扱の大切なこと

初生兒に特に大切なことは臍の取扱ひである。母の胎内にある時は臍帯を通じて血が通ひ、子供の生命を保つて居たのである。故に臍の傷は子供の臍の内部に通ずるので、微菌が附くと直に臍の焮衝を起すか、腹膜炎を起す。そうなると助かる見込みはないのである。初生兒に特別の病氣があるとすれば、殆んど總て臍の病氣である。臍から出血したり、焮衝を起したり、息肉腫と云つて、疣が出来たり、丹毒、破傷風の微菌がついたりするので非常に危険である。故に注意の上にも注意をして取扱はなければならぬ。勿論産婆が取扱ふのであるが、家のものも知つて居る必要があります。

○皮膚の爛れに注意せよ

初生兒は身體の諸所がよく爛れるものである。それは皮膚が弱いことを現はして居るので、大小便のために不潔になつたのを構はず、置いたり、

濡れた襁褓をあて、置いたり、よく洗はない襁褓を使つたり、又はすべて濕氣を帯ぶると爛れるので、つまり清潔法の充分でないことを示すのである。この爛れが殆んど身體全部に擴がることがある。こうなると全身に傷が出来たことになるのであるから、微菌が附くと敗血症を起して斃れるのである。爛れを癒すにはたゞ清潔法を嚴重にし毎日湯に入れ、清潔な柔らかい切れで水氣を吸ひとり、シツカロール若くは亞鉛花澱粉等を撤布してその場所を乾燥させるやうにすれば自然に癒るのであります。

○驚口瘡

初生兒の口中や、舌などに乳のやうな固まりが附いてとれなくなる。激しいのになると口中に擴がつて、子供は痛みのために乳を吸ふことが出来ないで瘦せ衰へてしまふ。これも一種の微菌で、原因は口内が不潔になるからで、人工營養の子供であると、哺乳壺、ゴム管、乳首等を不潔にして

置くと、そこから起るから器物を清潔にしなければならぬ、母乳であれば乳を與へる前後に一度づゝ必ず乳を拭いて置かねばならぬ。乳を與へる前にだけ拭く人もあるが、これは與へた後に拭いた方が理にあつて居る。後の方が乳首が乳汁で汚れて居るから。微菌は好んでかやうな處に繁殖するそれ故直に拭いてしまふと、微菌が附着する機會を失ふのであるから、次に與へる時にはざつと拭けば、それで不潔の恐れのない乳を與へることが出来る。人工營養ならば哺乳壺、ゴム管、乳首等の清潔法を嚴重にしなければならぬ。即ち使用後時を移さず洗つて、ゴム管は五十倍の重曹水中に暫く浸けて置いて、次に使ふ時に煮沸水で洗ふことにすればその心配はないのである。若し齋口瘡が出来たらば重曹水で拭くと大抵の場合には確實にとれるのである。頑固にとれないのは醫師の手にかけるのであるが大概は重曹でとれる。

○入浴の注意

赤坊は産婆が湯に入れるが、湯に入れることは大切なことで、日本でも西洋でも行はれて居る。入浴は身體を清潔にする爲めの目的ばかりではないので、それによつて身體を温め血液の順環をよくし、新陳代謝の機能を活潑にすることが大切なのである。故に熱があるとか身體に傷が出来たとか、風邪をひいたとかいふ特別の場合の外は毎日入浴しなければならぬのである。その外前に云つた爛れも防ぐことが出来、皮膚を丈夫にすることが出来るので、子供の爲めに非常に都合がよい方法である。湯の温度は攝氏三十八度位がよい、子供には手加減よりも出来ることなら寒暖計を用ひて温度を計りたい。我々ならば一度位高くても影響はないが、初生児は僅かの違ひも障るのであるから、手加減では不確實になり易い、寒い時と温かい時とで餘程加減が違ひ、又手の冷たい時と暖かい時とで違ふのである。石鹼は刺戟の少ないもの、舌で嘗めて舌に刺戟を與へないものがよい

石鹼である。アイボレ、スワン等ならばよい。

○適當なる保護を要す

子供に着物を着せる時、又は襦袢を取り換へる時はすべて温めなければならぬ。一人で寐かす時は蒲團も温めるやうに、すべて身につくものは冷くてはいけない。生れた時には湯婆を入れる必要があるが、熱過ぎると害がある。ある時夜中に子供が大熱を起したから来てくれといふ事で、直に行つた所が、子供は四十度以上の熱で、口は渴いて息がせわしくなつてゐる、よくみると小さな子供にその身體の大きさ位の湯婆を三つ迄も入れ、しかも非常に熱くしてあつた。それを取り除けて頭を冷したらば暫くにして平熱に復し、安静になつたことがありました。子供は保護することは大切であるが、極端になるとかういふ間違ひが出来る正當に生れた子供ならば特別に冷しさへしなれば、即ち冷たい着物を着せたり、冷えきつた夜具の中に入れたりしないで、温かい中に入れ、

自分で體温を保つことは出来るのであります。その程度で保護することが必要である。

要するに子供は弱いものであるから、看護者は注意を厚くして保護することが大切であると共に過ぎた保護にならないことを祈るのであります。

○本會二月例会

本會二月例会は廣告の通り、八日(第二土曜日)午後二時から東京女子高等師範學校附屬幼稚園で開きます。會員諸君その他お誘ひなさつて、皆さん御來會を希望致します。

○編者より

△本號から菅原文學士の譯述にかゝる『美學講話』を連載いたします。完結の上一つにまとめることの出来るよう附録として別ページにして置きました。編輯者の序としても記しておきました。皆さんの御精讀を希望いたします。

△本號から振り假名を去りました。之れで紙面が大層さつぱりして御覽の通り大層讀みよくなりました。

△振假名を去ることも、附録の掲載も今年の第一號から始める筈でしたが編者の手おくれで途中からになりました。尙ほ今後いろいろの方面に益々本誌を有益なものにし度いと思つて居ります。

○失明兒教育上の心得

失明兒を有せらるゝ家庭及教育者の爲に東京盲學校が發表せられた左の條々の心得は不幸なる失明兒の教育上最も適切なものと思ひます。同校よりの希望もあり一般に有益なる参考と思ひますから本誌上に全部を載録するゝことに致しました。(編者)

盲兒を有せらるゝ父母は該兒に對し特別の愛情と特別の心配とを加へらる可きものと知らる可し若し適當の教育と訓練とを施されなば盲兒は他日社會に立ちて幸福の人有用の民となり各般の義務を盡すことを得るに至る可し、然るに若し之に反して此教育と訓練を怠られなば盲兒は貧弱無告の者となり本人の不幸は言ふ迄もなく終生他人の厄介物たるに至らん。

(東京 盲學 校)

されば父母及び教師諸氏は宜しく左の事項を深く心に懸けらる可きなり。

- 一、失明の兒童を取扱ふには明者を取扱ふと同様に成る可く早く四肢と腦髓とを使用せしむ可し又兒童が手を使ひ得るに至らば各種の玩具を與へ、耳と智能とは談話、唱歌、音響のある玩具を以て常に興奮せしむるを要す
- 二、盲兒も亦有明兒と同じく其年輩に達せば歩行を教ふ可し
- 三、盲兒は同一の室内に獨居せしめぬやうに注意し、又長き時間一處に滞在せしむるが如きことある可からず、最初に各室を次ぎに全家屋内を後に庭園其の他屋外を歩行することを獎勵す可し、斯くて身邊の萬象に觸れしめ以て智識を收せ得しむることを努む可し
- 四、出來得る限り早く盲兒をして自ら衣服を纏ふに慣れしめ洗濯、理髮、爪切り等を教へ、清潔に、秩序的に物品を排列することを悟らしむ可し、又年齢に應じ食事の時は茶碗、箸等を使用せしめ、父母にして之を教ふる勞を厭はずば明者と

同様に爲し得可きなり、盲兒は自ら他人の所爲を觀ること能はざれば特に懇切に教ふるを必要とす

五、兒童の坐作進退に特に注意す可し、盲兒は他の兒童の如く動作を見倣ふこと能はざれば、明者の將來に許す可からざる惡習慣は亦盲兒にも之を除かんことを努む可し

例へば頭を振ること、顔を歪むること、眼の内に指を入れること、頭又は肩を屈げて坐し、又は歩行する如きこと之なり、苟も是等の惡癖を認めたる時は溫和に然も斷乎として矯正せざる可からず、一度習ひ性とならんか如何に長く教訓をなすとも效果無きに至らんのみ

六、室の内において成るべく明者と共に遊ばしめ常に郊外へ引率して運動せしめ、又少しづつ體操をなさしむ可し、靜坐を要する場合には必ず或種の玩具を與へ、常に心身を活動せしむる注意肝要なり

七、兒童をして各種の物體に觸れ且つ之を測量せしむ可し、觸れしむること、運動せしむること、測量せしむることに依りて空間并に距離の觀念を與ふ可し

盲人に最も必要の機關たる觸覺の發展には樹木植物、貨幣等の各種の材料を手に觸れしむるを必要とす

八、出來得る限り早く兒童をして家事上の仕事を執らしむ可し、先づ初めには「ボタン」に糸を通すこと、針に糸を通すこと、「豆類の殻を剥ぐこと、次にゴミを拂はしむること、洗ふことより芋の皮を剥くこと、簡易なる割烹、果實を採集すること等を爲さしめて遂には猫、犬、鳥、鶏の飼養并に監督に及ぼし、又一方には編物、裁縫、意匠的手藝を爲さしむ可し、盲兒は教ふる際に煩はしけれども厭はざれば其の修得は實に驚く可きものあり

九、時々且つ長く盲兒を對手に談話す可し、盲兒

は父母の愛情と温情とを面貌の上に見ること能はざれば音聲を以て之を表出する必要ある可しすべて盲兒は其の耳にするもの、感ずるものにつき常に疑問を發するものなれば、是等につきては一々丁寧に解釋し自ら斯る疑問を發する様獎勵す可し

十、盲兒の面前にありては忌まはしき事項につきて談話す可からず、盲兒は明者よりは一層能く談話を記憶するものなればなり

十一、盲兒の面前にありては失明につき同情の意思を表す可からず、他人にも亦之れをなさざるやう勸告す可し、斯くの如き同情は善意より出づるにもせよ、盲兒には憂鬱と悲哀とを増大するのみにして何の効果も無き者なればなり、されば寧ろ盲兒の精神を獎勵し、愉快に充ち満ちたる心を以て日課を爲さしむ可し、斯くてこそ終には外部よりの援助を受けずして生活を営み得るに至る可ければなり

十二、盲兒には記憶を練習する機會を多からしむ可し、其の機會多ければ多き程晩年に於て莫大なる効果の顯はるゝものなり、詩歌、古聖賢の經句、物語等を多く教授して記憶せしむ可し、盲兒は是等を學修して大いなる趣味を感ずるものなり

十三、盲兒には明者と同一様に道德事項を速かに教授し得可きものとす、故に之れに適應せしめて各々實行を爲さしむ可し

十四、盲兒學齡に達したるときは、直に盲學校に入學せしむ可し、斯くて盲兒は各學科につき初めて完全に教授せらる可き機會を得るなり

十五、失明者の眼は疾病常に斷えざるものなれば常に之が治療を怠らず、又多少の視力若しくは光覺を有するものは之を保存せざる可からず

十六、失明者は身體虛弱なるもの多く、且つ結核等の疾病に襲はれ易し、故に常に注意せざる可からず

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

美學講話

全十八講

『婦人と子ども』附録

第一講 入門

第二講 心像の話

第三講 感情の話

第四講 藝術の起原と職分

第五講 リズムの話

第六講 舞踊の話

第七講 音楽の話

第八講 色彩の話

第九講 線と形の話

第十講 圖案の話

第十一講 建築の話

第十二講 彫刻の話

第十三講 繪畫の話

第十四講 言語の話

第十五講 詩の話

第十六講 戯曲の話

第十七講 散文の話

第十八講 美と藝術

編輯者の序

一般教育學の基礎として、美學の研究の尊重せらるゝことは此の頃の著しい新傾向であります。丁度倫理學や心理學が教育學の基礎として尊重せらるゝと同じように、美學が教育研究の方面に縁の近い密接な關係を有するようになって來ました、教育者が美學の知識を要することは現今の大勢と申してよいのであります。今日の教育者で美學の知識の無いのは甚だ時勢に遅れたことになりませう。

それが普通の教育に於て左様であります。幼兒教育に於ては猶更のことでありませう。

(一) その第一の理由は斯うであります。教育に美學の法則の研究の必要なことを主張する人の標言に『兒童を教育するは藝術家がその作品を作るようなものである』といふことがあります。之れは確に一つの真理でありまして殊にその教育さるゝ兒童の年齢が幼い場合ほど一層真理であります。即ち幼兒教育者は、一面に於て、世にも美ばしき天分を有する大藝術家の中に列すべきもので、また其の素養を要すべきものであります。

(二) 第二の理由は斯うであります。

幼兒教育に取扱はるゝ教科教材は、殆んど皆美學の研究問題に關するものであります。勿論幼兒の唱歌、畫圖、手技等が、直に藝術ではありません。また、餘り藝術的標準で教育してはならな

いのであります。しかし吾々が研究の上からは美學の問題として取扱はるべきものであります。美學上の理論がそれ等の教科の正しい解釋に就て教へて呉れるのであります。

(三) 右の二つの理由を合はせて第三の理由が出來ます。

體幼兒教育が小學校以上の發育と、性質の上にも方法の上にも大に違ふものであるのに實際上げ屢々誤り混ぜられて居るのば、幼兒教育の理論が、矢張り小學校の教授法から割り出されて居る爲であります。そこで此の弊を救ふには幼兒教育の方法、教科兩方の研究を美學の知識に參照するのが一番適切な途であります。即ち、幼兒教育上の新開拓、新天地は、美學の知識を適用することによつて得らるべきものではあるまいか。編輯者はかねて斯う考へて居るのであります。而して幼兒教育者に美學の知識の必要を唱道して居るのであります。

本誌が此の『美學講話』を連載して、諸君の精讀をお勧めする理由は、上述三點で明かに御了解下さつたことと思ひます。幸にして、菅原文學士は、私共の此の希望に極く適切なる順序、内容、程度に於て、此の講述の承諾を與へられたのであります。尙ほ十八講の全部が終つた時、此の講話を豫備知識ともし、また講本として、同學士に一層綿密な説明や、音や色や形の實物に就いての講義を願ひ度ひと思つて居ります。而して、私共の希望を益々確にしたと思ひます。

譯者の序

編輯者が右に述べられたやうな主意に基いて、本號から此の『美學講話』を連載致します。

凡そ研究の對象として、子供の觀察と美術の研究ほど、婦人にふさはしいものはありませんまいと、かね／＼私共は思つて居ります。一體婦人の精神的活動に就ては、歐米は、思想なり教育なりの水準が我邦よりも高いのと、又總體の背景が我邦よりもずつと早くから出来上つて居るからでもありまじやうけれども、殊に此の點に就ては、何よりも羨ましい事に思つて居ります。

例へば兒童の研究者としては、米のシン女史、ムーア夫人、伊のパオロ・ロンブローゾー女史の如きは、皆それ／＼有益なる著述を發表して居りますし、又美術の觀察や美學上の研究に熱心な婦人としては、英のリー女史、獨のラントマン・カリツシエル夫人、米のマルティン女史、パツフロア女史、ゴルドン女史などは、何れも名高い人々であります。

ゴルドン女史は、シカゴ大學の人で、先年獨逸のヴェルツブルグに遊學して、哲學、心理學、美學の研究をした人で、一九〇四年に同地で發表した「感情的印象の記憶に就て」と云ふ論文は、心理學美學教育學何れの方面より觀ても、興味ある問題として知られて居ります。

一〇九年には茲に御紹介する「美學講話」の原書たる「美學」を著し、一九一二年には「色彩の配合」に關する面白い實驗的研究を發表して居ります。

本書は最近の心理學上の研究と美學上の觀察に基き、藝術一般に涉つて親切に説明を與へて居りますから、斯う云ふ目的を以て御紹介する書物としては、極めて適當なものであると信じます。尙原著の序を次に引きますと

「此書は専門學校程度の學生に讀ませる爲め、且専門學校の三四年程度で課せられる位的美學の講義の教科書に充てる爲めに著したもので、此書の目的とする所は第一に學生に美的經驗及美的活動に關する最も重要な事實を簡潔に傳へるため、第二には學生間に美的問題を實驗的に取扱ふ興味を起させる爲めである。」と書いてあるのを見ても大體が御分りになる事と思ひます。

右に述べたやうに、皆様に讀んで頂くと云ふ事を主にして講述して行くのでありますから、翻譯とは申しながら非常な取捨が施されて居ります。

併しながら要するに翻譯はやはり翻譯であります。女史の著述の大體の方案が出来上つて居て、それを尊重してそれに據つて、それを襲うて講述して行くのでありますから、餘り皆様の方へ引付け過れば、女史に對して禮を失する事になりますし、之と反對に餘り女史の原著に據り過ると、亦皆様にそぐはない處もちよいく／＼出来て参ります。従て私のして居ります事は、縛られながら動きのとれるやうにと云う矛盾に陥つて居るのであります。そう云ふ缺點は豫め皆様の御許しを願つて置かなければなりません。

美學講話

ゴルドン女史著
菅原教造譯述

第一講 入門

目次

美學とは何ぞや——藝術品と自然美——科學としての美學——美學と批評——美學と心理學——美學は規範科學なり
や——美學の目的——美學の方法——研究の方案

美學とは何ぞや

いろ／＼違つたものを澤

山集めて、是を一纏めにしてきちんと一部門に收めやうとするには、どうしてもその中の銘々に備はつて居る共通點を搜し出し採り出して來て、是を基礎としなければなりません。尙例を以て御話するならば、たとへば悲劇と喜劇、寶玉と寺院、唱歌と繪畫、と云ふ様にならなり懸け離れたものを、一纏めにする共通點とは元來何者でありませうか。曰く斯う云ふものは、皆美しいと云ふ點に於て同

様である。即ち共通點は美と云ふ事でありませう。すると、其の中には眼に見えるものもあれば、見えぬものもある。聞く事の出來るものもあれば、出來ぬものもある。巧に配列された言葉の文あやから成つて居るものも、然様でないものもある。とすれば一體美の性質とは何で有るかと云ふ問題が起つて參ります。

是に對する答は、第一に美とは藝術品自身に依つて極きまり、第二に此の藝術品を見る人の趣味に依

て極ると云はなければなりません。今此の第一と第二とを合併して纏めて云つて見れば、寺院、繪畫、音樂と云ふやうな第一の方の所謂藝術品は何れもそれを鑑賞する人の感情の上に、各特種の効果及ぼすと云ふ點に於て相似て居る、此の特權の効果は取りも直さず第二の方の美的感情、もつと適切に云へば美意識であります。元來此の美意識の態度即ち藝術品の觀方には二つあります。甲は自分で手を下さずに藝術を讚美し鑑賞するもの、見地で、乙は藝術家若しくは製出者としての立場であります。此の二種の意識を共に調査するのが主觀的方面からの美學の仕事で、換言すれば美學の一半は美しい物の鑑賞と製作とに關する感情の科學であります。又客觀的方面から云へば、美學は左様な感情を起させる美しい物即ち藝術品なり（自然美なり）の解剖と分類とを其仕事とします。換言すれば美學の他の一半は藝術品の科學であります。

藝術品と自然美

美學は藝術の美と自然の美とを共に研究しますが、兩者の中、藝術の美の方が一層重要視されて居ります。其理由としては、第一に自然の鑑賞は人間の製出した藝術品の鑑賞から出たものである事。第二に自然は其れ自身としては、美的經驗に肝要な個人的表出を缺いて居ると云ふ事、尙是は後に申します。第三に自然美は藝術品よりも實驗的の調査がむづかしく、從つて觀察者は多く好結果を得る事が出来ませぬ。故に自然美も全く美學の範圍外ではありませんが、主要な問題は却つて藝術品の方であると云はなければなりません。

科學としての美學

美學は科學の方法に從つて居りますから、矢張一の科學であります。故に美學者は標本を集めて、是を觀察し比較し分類して説明しやうとし、出來得る場合には適當な條件のもとに實驗をも試みます。美學の研究者は感情上の經驗や、「美」「醜」の判斷などをその研究の

資料とし、尙判斷を下す人、判斷を生せしめる事柄、並に判斷に附隨して起る情況などを觀察します。亦美學者は更に進んで同一事物に就ての異なる人々の判斷を比較し、異なる事物に就ての同一人の判斷を比較します。斯の如く或は對象の特徴を一々變化させ、或は被験者を色々の氣分において精細なる研究を重ねた結果として、どの場合に於ても終始一貫した或る事實を見出す事が出来れば、そこで始めて美學上の一つの法則の基礎を得て、徹底した或者を獲る事が出来た譯なのであります。

美學と批評

一言で言へば批評とは判斷を下す行爲である。批評は美の標準又は本位を準據として作品の良否を知る事であります。故に批評と美學とは、共に藝術上の製出物を取扱ひ、其の良否と良否の理由とを説く點に於て共通して居ります。次に美學と批評との差を申すならば、美學の方は美の標準を發見する事と、それを式で示す

事とに就ては批評よりも骨を折ります。もつと精しく申すならば、美意識の一般的の法則を見出して、その學理を建てるのが美學の仕事であつて、その法則が個々藝術品に應用された路行を探索する方が批評の領分となるのであります。更に此の二つの物の關係を短言すれば、批評は個々の場合の美學とも申されませう。又批評が美學に優れて居る一つの點は、批評は其れ自身藝術品たる事もある點であります。

美學と心理學

申すまでもなく心理學は心の働く有様を調べる學問即ち心的過程の科學であつて、感情、情緒、氣分等が其の研究問題の中にありますから、従つて此の中には美的感情又は美意識即ち美學の主觀的方面の研究事項が悉く含まれて來る譯であります。故に主觀的方面の美學と云ふものは勢ひ心理學と云ふ美學よりも大きい科學の一部分と考へて差支へがないのであります。茲では美學者を以て、一部分を一層精密に穿鑿する

心理學者と看做し、美學は進歩せる心理學の一部分と看做して置きます。

美學は軌範科學なりや

規範とは準據す可

き規則又は標準と云ふ事でもつと碎いて云へば手本と云ふ意味であります。科學を分類するに記述科學と規範科學との二種にするのが普通です。記述科學の方は單に事物の性質を明らかにし、如何に在るかと云ふ有様を述べるに過ぎないのであります。軌範科學の方はそれのみならず、如何に在るべきであるかと云ふ事迄説くものであります。

換言すれば、記述科學のやうに現實の狀態に甘んぜず進んで理想的狀態まで指示するのが軌範科學の綱要であります。

扱て心理學は心の有様を在るが儘に見て解剖し、記述して行くもので、例へば斯う云ふ考へを持つては不可いとか、この考は正しくないとか、これは醜いとか云ふように、その心的過程の善惡、美醜、合理不合理等には一向かまはぬ科學である

と云ひます。然るに是に反して、論理學は眞正の判斷と虚偽の判斷とを區別し、合理的の法則を示し又倫理學は人に如何なる行爲をすべきかを示し、最後に、美學は趣味の適當なる銑練を示し、且何を美とす可きかを説きます。斯の如く論理學、倫理學、美學は人が思考する時行爲する時感ずる時に補助となると云ふ意味に於て、規範的である、手本を示すものであると云ふのは眞實でせうし、斯る學問は各々標準軌範又は手本を立てやうとして居る事も確であります。

併し乍ら退いて考へるに、此の規範と云ふ事は等の學問と外の科學との相異點であるとは思はれませぬ。論理學や倫理學や美學のみならず、寧ろ凡ての科學は軌範を作らうとして居ると云はなければなりません。例へば心理學は常態の人の心と云ふものを確定しやうとし、變態心理學に於てすら、典型亦是軌範を認めて居ります。其他化學、生物學、又は數學の如きもの、智識すら猶、其方

面の結果を得んが爲めには如何にす可きであるかを知る爲めの學問であると云ふて宜しいのであります。例を舉げて云ふならば、血液の循環を早める爲には、アルコールを用ふ可きである。圓の圓周を得んが爲めには直徑に一・〇四一六を乗ず可きである、等の如きに見ても、記述科學も亦一面軌範的であると云へると思ひます。

これと同様に軌範科學も亦一面に於ては記述科學であると云ふ事が出來ると思ひます。例へば倫理學は個々の場合に就て人の探るべき道を語るものではなく、只だ過去に於て善と思はれた行爲の例を積み上げる事しか出來ないのであります。又論理學は現在の或情況からどんな結論を引出すべきかと迄は云へないので、たゞ過去に於て或資料から如何なる方法で有效有用な推論が出來たかを示すに過ぎませぬ。最後に美學はどう云ふ筆使ひで一番佳い畫が出來るかと云ふ事は云へませんが、既成の藝術品に於ける美の要素を分類し、記録

する事は出來るのであります。換言すれば美學は外の科學と同様で、記述的でもあれば軌範的でもあるのであります。

美學の目的

世間には自分の好きなものを知るのには譯もない事であると心得てゐる人が多勢あります。よく「私は藝術の事は何にも知らないが、併し自分の好みは分つてゐる」と云ふ人があるものですが、これは非常な間違です。

人は自分自身の趣味に就ては一向知らないので、自分で氣に入ると思つたもので、それを得ると失望することが屢々あります。

美學の主要な目的は、人各々に自分の趣味を自覺させ、それを明らかにさせると云ふ點にあります。

美學の方法

美學の方法は取りも直さず心理學の方法で、其種類は分つて觀察法、内省法、及實驗法の三とする事が出來ます。つい近年迄は觀察法と内省法とに主に頼つたもので、實驗法は此

の頭發達した新しい方法であります。

觀察法は客觀的方法とも云ふ可きもので藝術品自身にも、亦其れを樂しむ人にも兩方に應用する事が出來ます。樂しむ人に此の方法を用ゐると云ふのは聞く人の顔面の表情、姿勢、身振等を記す事であり、又藝術品自身をも觀察すると云ふのは、つまり美たる事物の觀察と云ふ事になります。斯の如き方法を用ゐれば、是に依つて美の法則を幾分知る事が出來ます。例へば藝術史と藝術の進化の研究とは此の方法に屬するものであります。

内省法と云ふのは主觀的方法で、物を美しいと思ふ時の心持は奈何か、藝術創作の心的活動とはどう云ふものかを調べるのであります。

實驗法と云ふのは或る條件にを以て制限された觀察法及び内省を指して云ふので、或は學者は感情に適用した實驗法を主として二ツに分け一を印象法、一を表出法を呼んで居ります。印象法の場合

は實驗者は被験者に示すべき材料をよく整頓し、是より生ずる被験者の印象即ち感じを集めて一定の結果を導いて來やうとするのであります。通例實驗の結果は「快」又は「不快」と云ふ判斷で報告せらるゝ、被験者の心的状態の内省的記錄を取る事であり、表出法では實驗者は豫め被験者に一定の連續刺激を用ゐて、例へば繪なら繪を見せて置いて、被験者に快不快何れかの心持を備へさせ、此の心的状態から生ずる的確な結果——通常呼吸とか脈搏とか顔面や四肢の表情運動とか云ふ生理學上の現象により注意するのであります。

要するに科學としての美學の進歩と云ふ事は、美學上の問題に對して段々實驗が應用されて行くのを云ふのであります。

研究の方案　藝術の研究に當つては、藝術

製作の二方面、即ち感情と形式とを必ず區別致します。藝術品の製出は「情緒より形式へ」の進歩で、此の働きは精しく云へば感情を傳達し表出す

る感覺と心像を發見し且つ是を調整すると云ふ事
であります。即ち製作の方は感情が土臺で、是を
傳達する媒介者として感覺及心像即ち形式を用ゐ
るのである。次に藝術の鑑賞はこれと逆で、此の
感覺及心像即ち形式と云ふ仲介者を通じて、情緒
を鑑賞する作用であります。心像は感覺の再現し
たもので、記憶の心像もあり又想像の心像もあり
ますが、藝術上では主として想像心像が働いま
す。斯の如く動作するには感情と想像とがいりま
すが、鑑賞するには想像と感情とが必要でありま
す。

是で大體の緒論とも云ふべきものが終つたので
あります。是れから第一に心像と感情とを心理學
的に説明し、次に藝術の起原と其の職分とを論じ
て、各特殊の藝術に對しての美學を究めやうと思
ひます。

第二講 心像の話

目次

精神作用の知的方面と情的方面——知的認識的作用——感覺とは何ぞや——心像とは何ぞや——視覚心像——聽覺心像——運動心像——言語心像又は說話心像——何れが美的感覺なりや——心像及思想即形式及内容——心像の論理的職分——心像の美的意義——創作的想像心像。

精神作用の知的方面と情的方面 一般の心理

學者は、人間の精神作用の全體を、知ると云ふ認識的方面と、感ずると云ふ感情的方面と、此の二つに分けます。感覺、知覺、聯想、記憶、想像、思考等の働は前者に屬し、感情、快不快、情緒、激情、氣分、情操等は後者に屬します。そして認識は客觀的方面と關係を持つもので、對象、出來事及外界の状態に就て語るものであり、感情は主觀的方面に關して個人的反應を表述し、又は主體即ち自分と云ふもの認識的刺戟の受け取り方を記するものであると申して居ります。

猶又認識の働は特殊の感覺機關と關聯するもの

で眼とか耳とか云ふやうな刺戟を受取る道具が其根本に於て必要であります、感情の作用の方は有機體を全體として包括する傾向が著しい即ち身體全體の調子と深い關係があります。

情的方面の細かいとは、第三講の「感情の話」の處で述べるとして、次に知的方面に就いて、大體の話をしていきたいと思います。

知的認識的作用 實物が目の前にあると無

いとを標準にして、知的の精神作用を分けて見ると、直觀又は知覺と云ふ作用と記憶・想像・聯想・思考などと云ふ働きと、二組にする事が出來ます。

知覺又は直觀と云ふ方は、菊の花なり哀みの曲

なり要するに實物があつて夫れが目や耳などに觸れて居る時の知的の經驗を指して云ふので精しい事は次に述べます。之に反して記憶・想像・聯想・思考等になれば、目の前に實物がないので、曾つて聞いた哀みの曲を想ひ出したり、又は美しい菊の花を想像して見たり、菊の花と哀みの曲との關係を推定したりする事でありませう。そして斯る記憶にしても想像にしても、要するに曾つて見たり聽いたりした實物の姿が、其通りにあり〜と心に浮んで來るなり、又は實物を變化したり置き變へたりして新しい局面を思ひ浮べたりする事であつて、そして其基く處由來する處は、どうしても實物を經驗すると云ふ事、即ち知覺と云ふ作用であります。

次に其直觀又は知覺と云ふ働を考へて見ますならば、今菊の花を見て居るとすれば、花の白色や葉の綠色、葉や花の形と大さ、自分よりの距離、若し細い花瓣が散れば其舞ひ落ちる運動、又花が

萼のつけ根の所からとれて机の上に落ちれば其バサリと云ふ音などを認める事が出來る。そして丁度化學上で水を分解すれば酸素と水素と云ふ二つの元素になるやうに、この菊の花の知覺を心理學の方で分析して其構造を調べ其成分を假りに元素又は要素に分けて見ると、一々の色や音や運動と云ふやうな極めて簡単な感覺と云ふものになつて來るのであります。

感覺とは何ぞや

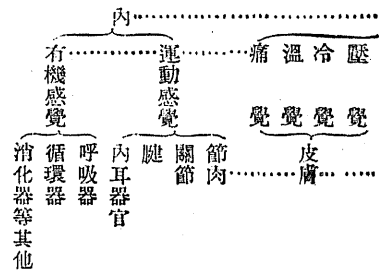
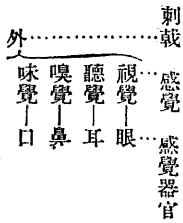
感覺は知覺と云ふ一つの纏まつた働を組立てる要素又は材料であります。

一體吾々が日常經驗して居るのは、決してこの白だの緑だのと云ふ一つ〜の材料ではなく、斯る材料が結合して拵へ上げて居る菊の花と云ふ全體の知覺であります。たゞ科學としての心理學の取扱ひの上から、丁度化學者が化合物としてのみ存在して單體として取り出し得ない炭素と云ふ元素の性質を論ずるやうに、假りに其一つ〜の材料を取り出したとして、これを感覺と名けて研究を

するのであります。

例て感覺はどうして成立するかと云ひますと、先づ第一に刺戟がなければなりません。空氣の震動がなければ音の感覺は起りませぬ。エーテルの震動がなければ色の感覺が起りませぬ。第二に此の刺戟を受取る器官即ち道具がなければなりません。音ならば耳と聽覺の中樞、色ならば眼と視覺の中樞が此の器官に當ります。感覺は斯の如く刺戟と感覺器官とが無ければ成立する事が出来ないのであります。

次に感覺にはどんな種類があるかと云ひますと刺戟と感覺器官と感覺とを各部類分けにして且つ互に相應せしめて分けて見れば次のやうになります。



心像とは何ぞや

一言にして云へば心像とは感覺の再現したものであります。たとへば昨日見た菊の花を想ひ出すなり、先月聞いた哀みの曲を思ひ浮べるなりする事で、何等の刺戟がなく、又感覺器官をも要せずして、猶且つ色なり音なりがあり／＼と心に浮ぶ、其浮んだ姿を心像と云ふのであります。そしてこれが嵩じて來れば、丁度幻覺のやうに實際眼に見え耳に聽えて來る事すらあります。要するに心像は以前に受けた感覺に依つて出て來るのであつて、吾々は未だ曾つて經驗

した事のない事物に就いては、どんな單純なものでも決して其心像を得る事は出来ませぬ。

知覺と云ふ實物が眼の前にある時の經驗を組み立て、居る成分要素又は材料が、感覺であると等しく、記憶・想像・聯想など、云ふやうな、實物が眼の前に無い場合の精神作用即ち表象又は觀念を組んで、居る成分が取りも直さず此の心像であります。

心像は感覺の再現でありますから、以前に經驗した感覺上の極めて簡單なる印象即ち一々の色なり音なり運動なりが心に浮んで來る事でありません。斯の如く一々の簡單なる感覺、例へば赤とか白とか青とか云ふ範圍内では、心像は單に元の感覺が再現するのみで、新に發明する所がありません。之に反して複雑なる事物なり光景なりを心像として思ひ浮べる場合になれば、要素たり材料たる簡單な心像が澤山集まつて複雑に混合して來るのでありますから、其要素たる心像の組

合せ方の如何に依つては、出來上つて來た其心像は再現的でもあれば又製作的でもある様になります。若し心像が單に古い經驗を其の儘忠實に模寫したものであれば再現的であり、又古い材料を新しい形に整へ直したものであれば製作的若くは創作的であります。

元來イメージ(心像)と云ふ言葉は、心理學者以外では目に見える類似物、例へば寫眞や彫刻が人の像と云はれる様に、似た姿を云ふ事でありますが、心理學上の心像と云ふ言葉は、目に見える物即ち視覺心像に限らず、各の感覺に通じての類似物を意味して居ります。故に聽覺心像もあれば、運動の心像もあり、又觸覺心像もあり、味覺心像もあるのであります。心像は單に感覺的性質即ち色とか音とか、又色にしても赤とか緑とか白とかの別があるのみならず、其の明瞭、續く時間即ち時限及強度なども色々あります。

視覺心像 心に繪を描く働き、即ち視覺心

像化^{ライズ}する作用は、人に依ても非常に違ひますし、同一人でも時に依て違ふことがよくあります。時には知覺と優劣のない様、即ち實物とあまり違はない位に、心像が完全に且生き／＼として居る事もあるので、これが即ち精神病者などによくある幻覺^{ハルシネーション}であります。併し常態ならば、心像はそれほど完全ではありませんから、感覺的經驗即ち實物と容易に區別が出来ます。一流の視覺^{ヴァイジュアルタイプ}心像型の人になれば如何にも生き／＼と過去の光景を思ひ出すことが出来るのみならず、猶進んで新らしいものを想像する事も出来ます。何れの場合にしても、事物の形、細部、光、色等が的確に表はれるので、斯う云ふ質^{たち}の人が繪が上手ならば、其記憶心像から實物と違はないやうな繪を寫し出す事が出来ます。視覺心像化する力の中位の人は、光景は可なりよく表はれて居り乍ら、其中一二の要素が際立つて明瞭で、外のは夫れ程ではないけれども、特に注意すればはつきりして來ます。又極めて朦朧

たる不完全な視覺より現はれない人もあり、甚しきに至つては全然何にも現はれない人さへあります。

聽覺、觸覺其他の種類^{ヴァイジュアルタイプ}の心像よりも、視覺心像を廣く用ゐる人を視覺型の人と申します。視覺型の人とは、必ずしも例外な視力を持つてゐるのと云ふ譯では無いので、或は却つて並より悪い眼の人も居りませう。視覺型^{ヴァイジュアルタイプ}の人は觸れたり、聞いたりするものより、見るものに氣をとめ眼を通して得た材料に依て思考する様な人を云ふのであります。視覺型^{ヴァイジュアルタイプ}の人は話を聞く時に、先づ其の言葉を言語の繪畫に引き直して、心で見た字句から意味を掴む人もあり、又或言葉、句、調子、關係等は必ず色や空間の形を暗示して居る様に見る人もあります。一般には科學的又は哲學的な頭の人は視覺心像化する力に乏しく、機械學者、建築家及藝術家はその力に富み、婦人及小兒は概して男子に勝つて居ると申します。

美學上では視覺心像を好愛し、他の經驗をも其れに依て説明しやうとしたり、又はそれに翻譯して仕舞はうとする人などは、視覺的氣質の人と云へやうと思ひます。

笛吹きが刻み成す音の響

及び

笛の音は圓柱上の脆き大斗たいとの如くアルトに昇り行けり

の如きは音響の心像を視覺及運動の心像に引き直す人の適例であると佛國の心理學者のリポーは云つて居ります。又シェレーの名詩「雲雀」中には次の様な面白い例があります。

おしなべて地も天も

汝がこゑにひらき渡れる、

冴ゆる夜の

孤雲ひとりぐもより

月の光ふりそそぎ、大空にみなぎることく。

視覺心像は記憶に留まる難易と云ふ點から數種に分かつ事が出來ます。例へば人に依つては事物の運動が最も容易く記憶に登る人もあれば、之に

反して靜的外觀即ち形とか色とか光などを好く人もあります。

運動の姿で成り立つた心像は、例へば飛ぶ雲とか降る雨とかのやうな自然物の動作と同じな身振り、瞥見、姿勢等に豊富で、斯る運動的の姿が歴々と眼に浮んで來るものでありまして、これは後に述べる運動型と確に共通して居る所もあります。併し此場合では心像は運動の視覺的方面に限られて居ります。斯様云ふ質の人は戲曲的效果を收めるのが上手であります。

形や光や色等の靜的狀態に關する心像は、一層純然たる繪畫的のものであります。併し畫家は皆此の純然たる繪畫的心像を持つて居るとは限らなると云ふのも面白い事であると云はなければなりません。繪畫には文學的、寧ろ敘事的性質を持つて居るものも澤山あります。左様云ふ繪は物語や或る事件の推移を示して居るので、従つて其の興味は形や色より別の事柄であつて、刷毛や繪具の到

底現はし得ない事になるのであります。併し、元來繪は時間の推移を現はす事の出来る者ではなく、又繪に物語同様な事件の聯絡を示す様に望むのは無理であります。要するに繪畫と云ふものは單に色の效果、線と線の關係、或は或人の現在の形だけを現示すればそれで十分なので、是が現に最も面白い眼に見る物語なのであります。

この論旨から云へば、此處に掲げたミレーの名畫「暮鐘」は佛蘭西の暮鐘に對する外的知識に依る所が非常に多いから、嚴正なる繪畫的構想では無い、と云ふ批評があるのも尤もな事であると思ひます。

故に換言すれば、或思想が繪畫的であるか否かは、第一其の繪畫に題が無くても分かるか如何かで極まるものと云はれなければなりません。例へば淡黄、眞紅、靑、斯う云ふ色が畫面に現はれて居



たにしても、何にも題は要りませぬ。さつと拂つた線や柔らかな蔭影等は、繪に取つては立派な題目でありませぬ。線や色そのものを愛するの無ければ、嚴正に云へば視覺型の人とは云へませぬ。

聽覺心像

オーディオタイプ
聽覺型の人には記憶

するにも思考するにも、音響の力を借ります。知人を覺えるにも、其の顔では無くて聲に依ります。ヴァイオリンと云ふ觀念を作りなして居る心像は、其の形や色よりも寧ろ音色であります。聽覺型の人には印刷物を讀む時には、其の言葉が聲で云はれた様に耳に響いて來る、さうすると始めて讀んだ所の意味がすつかり分つて來ると申します。又米國のレイ博士は――

「聽覺心像は自分には視覺心像と同じ様に肝要なもので、音樂であるにせよ、ないにせよ、凡て私

の聞いた音を心に再現するのはこれである。強さこそ及ばぬもの、音色、高さ、時間等は實際の音と比べる事すら出来る。自分は一分時間で演奏せらるゝ音楽の一節の聴覺心像を聴けば、一分と云ふ時間を的確に量る事が出来る。」

と云つて居ります。

耳に認へる音の刺戟は目に認へる色や光の刺戟よりも情緒に及ぼす影響が密接で深いものであると云つて居る學者もあります。美學の論では音楽は繪や彫刻のやうな視覺に認へる藝術よりも、氣分及情操をよりよく表はし、且一層主觀的で凡ての藝術中最も感情的なものとしてあります。併しこゝに注意しなければならぬのは、音楽は單に耳に許り訴へるとは限らぬと云ふ事、及其の音の部分、即ち明らかに耳の仕事と極つて居る所すら、リズムほど大切なものではないと云ふ事でありませす。然もリズムは必ずしも耳の經驗には限りません。聴覺のリズムは視覺のリズムより一層「運動

的」なものだと云ふ事が分れば、在來の説に非常に好都合であります。光線のリズム的な閃きを研究した米國のマイナー氏は、左様云ふ視覺刺戟は音響のリズムと同じ様に運動を起させると斷言して居ります。

次に非音樂的な音響の效果に就て例を擧げて御話させよう。幼兒は妙な物を見せられるより、妙な音を聞かされる方が遙かにおびえます。成人でさへ雷雨の時には電光よりも雷鳴に感動するものであります。是に關して或人が次の様な事を書いてよこしました——

「私は小さい豚を解剖して居つた。これは遣り付けぬ事ではあり、多少不愉快であつた。併し其の不快の要素は、其の動物の様子や、其れが指に觸れる時の感じでは無くて、缺が皮へ喰ひ込む時の音であつた。無論一方では切ると云ふ考へが不快ではあつたが、其の感情を起させたのは、矢張り豚の様子や觸接のためでは無くて、音響であつた

様に思はれた。其の時を思ひ起す度毎に、同じ感情がギシ／＼云ふいやな音の記憶と共に起つて來る様な氣がする。」

是れは實例に就いて述べたのでありますが、次に生理學の方の理論から申して見ましやう。

音響の感情的性質を生理學上から辯護するものは、大脳の關係上、視覺中樞と運動中樞とよりも、聽覺中樞と運動中樞の方が密接であり、且聽覺の反射中樞は、視覺の其れよりも循環變化を司る神經に近いと云ふ事を云つて居ります。併し其れにしても猶ほ聽覺印象の方が、視覺印象より情的であると云ふ説は果して正しいかどうかは斷言が出来ませぬ。たゞ人に依つて心像の型にいろいろ相異があるのは事實であります。従つて視覺的氣質の人には情緒は視覺及視覺心像の邊に集中しましやうし、又聽覺型の人に在ては、情緒が聽覺の感覺及心像と一層密接に關聯して居ると云ふのが穩な様であります。

聽覺型の人が注意もし又記憶しても居るのは音響の經驗で、さう云ふ人が自然に求める表出は、音樂又は耳に訴へる言葉であります。獨逸の音樂家シューマンは、八歳の時から音樂的肖像とも云ふべき聽覺の心像を描いて楽しんで居りました。それは友達の子供連の容貌や性質の特色まで、色々の歌の節や色々のリズムで心に描き表はしたものでありました。藝術上の聽覺心像の中、最も重要なものは、音樂と詩の二つであります。次のペアティーの詩は聽覺心像の適例で、各行皆音響の心像を暗示して居ります。

されど誰か聞き分かむ歌の調べを、

ほしいまゝなる流れば 山蔭をさざめきくだり、

牡牛のうめき 羊らが可憐の鈴、

いちばやき牧者が笛は 人もなき谷間にむせび、

さわがしきつのはるは 峯かけて崖かけて

はるけく遠く 反響しあへる、

洞空なす海の潮鳴

峰のつぶやき、雀が愛の歌、

さて並木を覺ます豊かなるもるごゑの歌

伏屋の犬は、曉の順禮に吠ゆ

桶がづく乳をとめ、歌ひつゝ、輕げに行けば、

口笛しうそぶく農夫、畑さしてたかぶり歩む、聞け！

坂降りなやむ、重き車のきしめきを、

さら／＼とさやぐ穗わけて、驚ける兎は踏べり、

しづ／＼と村の時計は、ねむげなる時をうちぬ

さと許り異ならして、鶴鳩ら飛び立ち

人しれぬ塔より、斑鳩ぶかくもなげく

さてひばりこそ空の塔より、すゞしげに歎び歌へ。

運動心像

運動型モータータイプの人は、運動に由來した

心像で考へます。人の運動の經驗は、筋肉、腱、關節

からの感覺で出來て居ります。斯う云ふ器官は

凡ての知覺、殊に視覺と觸覺には、必ず働くので

ありますから、従つて運動心像は自然豊富であり

ます。運動型の人は、繪を考へるにもそれを描く

に必要な、若くは其の線を真似るに必要な運動に

依るのであります。行進とか疾走とかを思ふに

は、さう云ふ繪や、足音に依らずに、自分の足に

その運動を感ずるのであります。或行爲の記憶は

緊張及努力の記憶で、其行爲をする時に使ふ身體

の部分に曲がつたり、推したり、引いたりする感

じであります。例へば生れつき視覺と聽覺とが失

はれた米國のヘレン・ケラー女史の心像は甚だし

く運動的且觸覺的で、握手で友達の性格が印象さ

れるので、さうして人を覺えるのだと云つて居り

ます。又専門の運動家及舞踏家は運動心像に依て

考へる事が多いでせう。ベインと云ふ英國の心理

學者は筋肉觀念を論じて次の如くに述べて居りま

す――

「前日骨を折た仕事を思ひ出す時の様に、力の入

つた行爲に對する感情を思ひ起すとする。所で思

ひ出すにつれて非常に興奮すると、自然前の運動

を繰り返す様な勢になつて、容易にこれを止める

事の出來ぬのは明白な事實である。感情は一度び

知つた道に突進して、同じ筋肉を襲ふので、夢を

見てゐる犬が足を動かしたり吠えたりするもこれ

と同じ事である。」再た「運動心像に依てする思

考は、抑壓せられたる談話又は行爲である。」

言語心像又は説話心像

味覺・嗅覺・壓覺・溫

覺・痛覺・有機感覺と云ふやうな下等感覺の心像の論に取り懸かる前に、上述の視覺聽覺運動感覺から來る三様の心像で成立して居る言語心像ワール・イメージの話をするのが當然の順序であると思ひます。元來言語と云ふものは思想を代表する記號である。もつと精しく云へば、言葉は連續した思想の大部分、及び非常に抽象的な且複雑な思想の全部を補助するに缺く可からざる象徴で即ち符牒であります。言葉は見もし、聞きもし、話しもし、書きもするのでありますから、随つて言語心像は視覺的でもあり、聽覺的でもあり、又運動的でもあります。猶此の事は病理上からも證明されます。例へば失語病即ち話説不隨の病及失書病即書記不隨の病氣に關する事實から、話した言葉及び書いた言葉に對する暗示は、或人には視覺的であり、或人には聽覺的であり、又或人には運動的であると云ふ事が分かります。併し一人で此の三種を混有して居る

事も珍らしくはありませんが。ヘインの説話心像の説明は運動的の言語の心像をよく述べて居りまして、斯様云ふ時に引かれます。「人が言葉又は文章の印象を思ひ起こす時には、口に出さぬ迄も、殆んど發言せん許りに其の發言器官がうごめて止まないものである。精しく云へば發音部即ち喉頭、舌、唇などは皆感せらるゝ位著しく刺戟され運動の心像が明瞭に起る。斯の如き發せざる即ち抑壓せられたる發音が、取りも直さず回想、智的表現、説話の觀念、言語の心像なのである」と。

次に實例を擧げて見ましやう。運動的言語心像を試めす一法は、口を廣く開いて、夫からブクブクとかモグ〜とかいふ様な言葉を考へて見るのであります。斯うして見て言葉が一層明瞭に考へられ、ば、其の言葉の心像は大抵運動的であります。言語心像が劇的、抒情詩的、哲學的等に分けられるのは、一つは記憶に残る言語の文學的性質

から、又一つは各個人の言語心像のスタイルの差から分けるのであります。

他の感覺に由來する心像 人に依ては臭ひ

の心像が非常に重要なものであつて、普通の人に氣の付かないやうな色々の物や場所に對して、それ／＼特種の臭ひを嗅ぎ分ける人があります。併し此様云ふ人は餘り有りません、有つてもこれは多少異常的であらうと思はれます。冷、温、痛、壓、味、及有機感覺の心像はまだ説きませんでした。吾等は視、聽、運動等の心像程人の思考上に肝要なものではありませんが、これが伴つて來ると、回想が非常に活き／＼して來るものであります。

感情心像 感情若くは情緒の心像とも云ふ

可きものが果してありませうか。リポーは在ると云ふ説で、認識記憶と同様に感情記憶も有るからには、認識心像と同じく感情心像も有ると主張して居ります。成る程人は喜んだり、悲しんだり、恐れたりした事實を、記憶もすれば、想像もしま

す。併し是は單なる認識的行爲に過ぎ無い、記憶心像や想像心像が現れて來るのみで、感情心像があるとは云はれませぬ。眞に感情自身を回復し又は發生させるには新しい感情が必要である、認識的方面に於ける新知覺と同等の新鮮な感情が必要であると云はなければならぬと思はれます。

何れが美的感覺なりや

ヘーゲルと云ふ獨逸の哲學者は、藝術に於ては或思想が感覺に表はれて居なければならぬ、而して其思想を代表する感覺は視覺と聽覺の二種であると云つて居ります。此の哲學者の意見では目と耳以外の感覺は美的經驗に全然關つて居らぬと云ふ意味になります。が、果して此の説が正しいかどうか、先づ此の點を精しく調べて見なければならませぬ。

各種の感覺に訴へる色々の藝術を挙げますと、

(一)視覺に對しては、建築、彫刻、繪畫、裝飾美術、動作及舞踏の技術があり——(二)聽覺に對しては、音樂、詩、話術、等があり——(三)嗅覺に對し

ては、香料があり——(四)味覺に對しては、割烹があり——(五)觸及筋肉感覺に對しては、舞踏及體操等があります。此の中へーゲルに依つて美的と認められたものは、眼及耳に訴へる(舞踏も其の視覺的方面のみを云へば)技術許りであります。

成る程美しい物は根本的には、眼若くは耳に直接訴へる所が無ければならぬ、先づ見えるか聞こえるかせねばならぬと云ふ事は尤ではありますけれども、それにしても猶外の感覺も美意識に對して缺くべからざる心像を供給するものであると主張する事が出来ると思ひます。例へば美の要素として、色の冷たさ温かさ、柔らかさ、音調の甘さ、線の滑らかさ、力、勢、彈力など、云ふ事をよく申します。無論斯様云ふ言葉は譬へに過ぎませんが、其れでもさう云ふ形容は確かに皮膚、味覺、筋肉等の心像を喚起するものであります。又人間の運動的の装置は音樂のリズムとテムポーとに合つて居り、運動に對する刺戟が、音樂及視覺藝術の鑑

賞の大部分を成すことも往々あります。最後に美意識に強烈な情緒の伴ふ時は、有機感覺も伴ふものであると云へます。故に美しい物は聽、視のみならず他の感覺にも關係のある事が分かります。斯様云ふ外の感覺の心像は邊として、背景として、若くは聯想の雲として伴ふもので、藝術品の觀察に多くの感覺が伴へば伴ふ程、鑑賞者が其裡に没頭することも深いのであります(美的感情の標準の一)。感覺に訴へる所が深ければ、深だけ細かければ細かいだけ、人は藝術品に餘計魅せられる譯なのであります。

心像及思想即ち形式及内容

藝術家が發表

し傳達すべき筋即ち内容は、是を表はす手段として運搬器として用ゐられる形式と區別する爲めに、「思想」と呼ばれる事があります。これは「思想」と云つても藝術家の「意味」と云つても、又は「情緒題目」と名けても、何れにしても實は同じ事でありませぬ。扱、「思想」にしても「情緒題目」にし

ても、其發表傳達の手段として何等かの感覺的附隨物、又は附箋無しで意識中に現はれるものではありません。此の感覺的附隨物が感覺及心像なので思想又は題目は感覺と心像とに代表される所に其の意味或は意義があるのであります。

心像の論理的職分

論理的及實際的主意か

ら云へば心像と云ふものは、もつと遠い目的に達する爲に用ゐられる手段に過ぎないので、心像の確な形なり音響なりは、その的確な意味程重要な物ではありません。即ち心像それ自身の大切さよりも心像が代表して居る意味の方が遙に重大であると言はなければなりません。心像は一つの目的を達する爲めの手段でありますから。全く別な種類の心像からも同じ仕事も出来れば、同一結論も推斷される事もありませう。

猶例を擧げて申しますならば、上に引いたレイ博士の言葉では、博士は一分間を費す音楽の一曲を演奏したと想像すれば、一分間の長さが分か

ると云つて居ります。今度は音でなしに運動の心像で、或距離を歩く想像をして、一分間を量る人もありませう。此の二つの場合には別々な心像を用ゐて、しかも同一の目的、同一の仕事、即ち時間の推定がされたのであります。

これは實際上の事實としての例であります、これを次のやうに論理的結論の形で云ふ事も出来ます。レイ博士の推論を、「此の音楽の演奏には一分時を要す。余は今、心にてその演奏せられしを聞き、故に一分時は今過ぎ去れるものなり」としませう。又今一人の人は、「余は或距離を行くに一分時を要す、今余は其距離を行く歩数を想像せり故に、今一分時は過ぎ去れり。」と推論すると致しませう。此の論理的若くは實際的目的の見地から見ると、心像は音の心像にした所で、運動の心像にした所で、何れにしても要するに各個人の特癖に依るもので、其の感覺的性質は、音であれ運動であれ、格別仕事なり目的なりとは關係のないもの

であると云ふ事が出来ず。今一つ例を挙げませう。遠足をした一團隊の人々に、途上辨當を使つて場所を思ひ出させると致します、すると「それは丘の上であつた、私は其處の小川の音を覚えて居る。」と云ふ人もありませう。此の人は音の心像に依つたのであります。又「然様、小山の上であつた、私は其處で眺めた景色を覚えて居る。」と云ふ答もありませう。此の答は視覺の心像に依つたのであります。又「私は攀ぢ上つたので覚えて居る。」と云ふのもありませう。此の人は運動の心像に依つたのであります。此處でも亦心的作用の一端が行はれたのでありまして、聯想に依て一隊中の異つた人々が返事をし、聯想の連鎖即ち仲介者たる心像は、それぐく相異り乍らも、同一結論を得たのであります。

右に述べたやうに心像は過去の經驗の再現に有用な許りでなく、又將來を想像させると云ふ一層重要な役を持つて居ります。此の遠足をした人達

は各自の心像に依つて右の質問に答たのみならず、質問以外の場合にも此の心像を働かせることがあります。例へば小川の音を思ひ出した人は、これは詩作に好い所だと申しませうし、登攀の暑さ苦しさを思ひ出した人は、今後斯う云ふ處へ遊びに行つたり、晝食を使つたりはすまいと思ひませう。斯様に過去の經驗の心像は將來の行爲を變更するに關つて力あるものであります。又心像が將來の行爲に影響する以前に、心像其物が幾分變化すると云ふ事に注意しなければなりません。

一人の心には小川の心像が詩作の心像と一所になつて了ひ、又山登りを止めやうと決心した人は、其の決心に相應する心像を持つて居るのであります。それは登山の運動心像に加ふるに何等かの否定的運動心像を以てするので、頭を振るとか「もう彼處は御免だ。」と口に出して云ふとかする事もありませうし、平地歩行の心像（登山の否定を誘致する位の）であることもありませう。心像が斯

様云ふ風に變つて來ますと、最早單に過去の出來事を再現するに留まらず、創作的となつたので、次いで起るべき新しい行爲を示して居るものでもあります。

再現的心像は古い經驗を代表するものだと見做して來ましたが、併し再現的心像は必ずしも實物の代表即ち代理的知覺ではありませぬ。元來吾々の意識は必ず將來に多少關係のあるもので、古い經驗は決してそつくり其の儘出て來るものでもありません。又さういふことは必要でもありません。心像の變化する程度は澤山ありますが、再現的心像は其中最も變化の少ないものであると云ふ事だけは云へるのであります。

心像の美的意義

右に精しく述べたやうに

心像と云ふものは論理的及實際的目的に對しては、たゞ手段として役に立つもので、餘り大切な關係を爲して居るものでないにしても、藝術及美學の方面に於ては最も重要な問題として現はれて

來るのであります。即ち論理的及び實際的に對しては視覺の心像が來ても、音の心像が出て來ても、運動の心像が働いても、少しもかまはなかつたのでありますけれども、美術上に用ゐられる心像は決してこんなに融通の利く無頓着なものではありません。ベートーの「ジオルジョーネ派」と云ふ論は何人にも合點が行く様に此の點を説いて居ります——

「音樂、詩、繪畫、其他凡ての藝術上の製出品は、一定の同量の或内容（即ち心像と成つて現はれて來るべき思想）を、別々の國語に翻譯したに過ぎぬと云ふ考へ、即ち繪ならば色、音樂ならば音、詩ならばリズムと云ふ技巧上の發表手段たる感覺及心像に翻譯されたものに過ぎぬと云ふ説は、通俗の批評の誤謬である。若しかう云ふ風にとれば、或る思想を現はす爲めには、色が來ても音が來ても構はないと云ふ事になり、従つて藝術上の感覺的要素と共に藝術の藝術たる生粹の所は凡て閑却され

て了ふ譯である。これと反對の意見、即ち藝術の感覺的要素は、他の何れの形にも變へる事の出來ぬ美の特殊の状態なり性質なりを有する。即ち色は色で獨特の美的價值を有し、決して音で代用する事が出來ないものであると云ふ原則がばつきり分かれれば、茲に眞の美的批評が始まるのである」と。

斯の如く實用的方面と美的方面とに依て、心像の職分が異ふのは事實ではありますが、併し又其の相異を除き大きく見過ぎてはなりません。藝術は究極は實際的のものであると云ふ論は後の章に申しますが、兎に角此處では論理的及實際的目的は、藝術的なものと違ふ事があると云ふ事だけ認めさせていただきます。

創作的想像心像

新しく出來た物を調べて

見ると、機械にしても、音曲の節付け即ち旋律にしても、戯曲の創作にしても、皆古い材料を新しく配置したものに過ぎないと云ふ事が分かりま

す。創作とは要するに配置の變改と云ふ事で、新奇とは畢竟在來の物の結合の謂であります。併し此の創作の路行きは、例へば笛を吹けばそれに合はせて踊つて呉れると云ふやうに、すぐ注文に應じて出來るものではない。命じたとて新しい結合は必ずしも出來ると限つたものではありません。つまり發明を強ゐる事は出來ないのであります。

新しい考が起るのは大抵天恵に依るものらしく、詩人、畫家、機械發明家、一口に云へばあらゆる種類の獨創家は新しい構想の神祕を感じ、又は是に襲はれるとでも申しましましやうか、云はれ新しい構想は突然に浮かんで來るものゝやうであります。

例へば或部屋に壁畫を思ふ通りに畫いて貰ひたいと頼まれた或る畫家の話によれば、成る程此處に繪を畫くのかと思つて、自分の描く可き空間を眺ると同時に、後にそこに描いたと寸分違はぬ構圖全體がありくと浮んで來て眼に映つたと申しま

斯の如く、發明は無意識の世界即ち潜在意識の域から、既に出来上つた形で湧き出す様な性質のもので、換言すれば間の好い偶發事件と云ふ様な性質を帯びては居りますが、それでも猶如上の偶發事件の起る機會を有意的に増す事は不可能ではありませぬ。換言すれば自分で資格を作る事が出来るのであります。即ち其人が神祕を感じる方面と關係のある心像及觀念に浸潤するやうになれば出来るのであります。例へば數學上の發明は熟達した數學家に、音樂上の發明は音樂家に、繪畫上の發明は畫家に起るもので、要するに或方面に習熟して居る人は其の方面に於ける新發明の要素が多いからであります。

新しい關係を知覺する人又は臆説を生み出す人の精神状態の説明として、次に英吉利の文豪メレディスの傑作「エゴイスト」といふ小説の中の一部を引きましょう。

ドクレーは庭園の中を彼方此方と歩きまはつた。彼はかの内

心の舞踏鏡に映る時には、必らずとんだりはれたりして見える活潑な慧敏な機智をそなへた紳士であつた。彼は刹那に計略を見抜きもすれば刹那に仕組む事も出来た。併しそれは、其の鋭敏な知覺力を氣長に動かして、過ぎもせず又不足もない程にとつくりと思案を経た後に出来るのであつた。クロッスツエイがミッドルトン嬢に意があるといふ話を聞くと共に、此の四十時間中のクロッスツエイに關するあらゆる心像が、生き／＼と彼の前に浮き出して見えた。彼はその心像の何れをも毛頭考へるではなく、只置き換へて見分してゐるうちに、其の立派な容貌同様、鷹然とした彼の心は悠々と構へて、どこを攻撃すべきかはたゞ彼の本能の向くがまゝにしておいた。

兎角分別の勝つた人といふものは、事を爲るに上つた方法で、行きつた道へと、當て推量をする弊に陥り易いもので、この輕率な推量が迷路にまよひ込む元なのである。

が、即かず離れず、靜かに事件に眺め入つて、其の重さとか合を、よく／＼計るだけの材料を、見集める事の出来る人は、眞正の秘輪を握るか、さもなければいつそ何も得ない。寧ろ何にも得ぬ事の方が多には多いが、さういふ人に限つて、知慧に囚はれる煩ひはなく、當推量をする人の様に、却て謎から遠ざかる憂ひもなく、ありのまゝに物を見る事が出来るものである。とはいふものゝ、さういふ人は、成功せんが爲めには、冷靜で悟りの好い許りでなく、時に應じて人の容子を正確に讀む術に達して居らなければならぬのである。

次に又暗示を得る工夫をもする事が出来ます。

有名な例としては畫家ターナーなどは、子供に繪の具をあてがつて、子供が是をいろ／＼に塗つたりなすつたりするのを始終注意して居て、偶然に色が結合して或る組合せを作り出すのを見てそれから發見をする事が多かつたと申します。

思考上の眞の創作的瞬間と云ふのは、心で類似を發見する時、即ち以前には現はれ無かつた類似、若くは部分的一致點に氣のつく時を指して云ふのであります。天才とは別々の物の間に、外の人に分らぬ捉へ難い類似點、若くは隠れたる一致點を捉へるの謂であります。例を舉げて云ふならば、二者の間には非常な相異があるにも關はらず、ガリレオは寺院の灯と彗星との間に類似を見出し、ニウトン^{Newton}は落ちる林檎と地球との關係を、又ワットは湯沸に起つた事と機關車に起る事との間に同一點を發見しました。

藝術的構成(布置)に於ても、やはりこの疑問を考へ、類似點を觀察する事が創作的の働きとなる

のであります。文學的效果は之と實に關係の深いもので、直喩、暗喩、諷喩、比喩、物語、比較等は皆之にはいります。主題を豊富にし、光輝を添へんが爲めに、作者は何かに其を譬へ様とするので、そこで比喩が作られたり、古い材料が新奇に列へ換へられたりするのであります。文學的比喩には斯うした部分的の一致が始終出て來ます。

一例を舉げれば――

灰とこそなれ

人みなが思をこがすうつし世の望みは、

ばたさかゆるも とばかりあれば

しこの野づらの雪のこと

しばしなてらし――消えぞゆく

てりては

一方には「うつし世の望み」と云ひ、他方には「野づらの雪」と云つて居りますが、此の二ツを一所にして無常流轉と云ふ共通要素を強ふるの詩人の創作的事業であります。「現世の希望の儚なさ」と云ふ思想を強める爲めに「野づらの雪」な

る心像を發見する事は藝術的創作であります。此の「類同の知覺」の働いて居る所は、繪又は音樂では表はし憎くさうに思はれますが、併しそれは

發見したのであります。又音樂家は同じ題目を取つて、別の運動に發展させ様々のものに譬へます。例へばそれをマーチカワルツに仕組む事も出來ませうし、挽歌にも快活な環舞の曲に

見掛けだけで、實はそんなでもありませぬ。此の圖は北齋の「富士百景」中の海の波の略圖ですが、一

目見て分かる通り、決して實物を其儘寫生したものではありません。此

明の痕が歴然として居ります。此の繪の最も特出して居るのは波烟の端を距狀けつめに描いた所でせう。又

天才とは隱微な且新しい類似點を捉へるものであると申して來ました。随つて天才が其の思想感情を發

と幾千幾億の握り詰めた手や距との類似を認めた點なのであります。此の類似を描き留め且それを強めて、茲に北齋は繪畫的發明を仕たのであります。實際の波を斯ふ云ふ風に觀、且特點を誇張する事に依て、彼は單なる波の思想に生氣と峻刻とを添へる心像を



表するには、珍らしい綺語と顯著な心像とを用ゐるので、此の點がとりもなほさず其の藝術家たる所以なのであります。要するに大藝術家の思想と云つた所が、それ程懸け離れたものではありませぬ。シェークスピアにしても在來のものを彼方此方から借用致しましたし、凡ての大創作家がやはり皆さうなので、たゞ其の思想に與へた的確なる形式だけが、唯一獨特のものであると云ふに過ぎませぬ。元來抽象

的な考へを、強い明らかな心像に直しますと、其效力は幾倍かされたと同じ事になるので、例へば「自制」と云ふ考へは、そのまゝでも尊重すべきものではあります。吾は靈の長なり」と云ふヘンリーの言葉の様な云ひ方にすれば、余程力がつきます。藝術家の特に意を用ふべき所は、強く効果の多い形式、新奇な面白い心像を探し出す事です。

天才が珍らしい心像を作りますと、得て誤解を招き易いもので、公衆の或者には朦朧として捉まへ所なく思はれるのは已むを得ません。シェリーの「雲雀」などは此の例で――

いとたかくいやたかく

おほづち 大地ゆ なればとびたつ、

火の雲のこと………

「雲雀」と「火の雲」との感覺的内容を分析しますと何處に類似點があるのか一寸分りません。従つて其の心像に動かされぬ人ならば空漠として居る

と云つて斥けてしまひませう。がこれを理解し愛し且其の適切と正當とを感じ得る人ならば、「雲雀」と「火の雲」との間の理解は出来ないにしても感ずる事は出来る。或微妙な連絡を認めるに相異ありません。二者の間には或情緒的、一致があります。吾々は理性から見ても従ふ事の出来ぬ者に對しても、猶同情を以て評價する事が出来ます。純朴な心は、その到底解剖する事も説明する事も出来ぬ作品の味を感ずる事が出来るものであります。

メレディスの小説には理屈無しで只悟る外仕方のない面白い奇抜な心像が澤山出て居ります。「眼臉にローマンティックな物語の宿つて居る様な娘」とか、「磁器其の儘の優男」とか、又「感傷主義とはセンチメンタリズム肉欲主義のいと絆とは柔らかに爪さぐる事を云ふ。」など、此種の非常に生き／＼した面白い言葉を應接に違もない程浴せ懸けます。



太郎

『
 鶯は好い聲だね』

クラブ歯磨きを使って
 含嗽したんだらう。

花子
 『
 梅の花は好い香りね』

クラブ白粉を着けて
 お化粧したので
 ーはう。

○先生随分おもちやが來ましたね○どこから○これはね東京のフレイベル館から園長さんが買つて下さつたの○フレイベル館のおもちやはいーのね○先

生々々僕シーソーにのせて頂戴○先生私に此のマ、ゴト貸して頂戴

○先生之は何です

之はね積木でもつて電車でも流車でも出

來て車があるからほらこころ

がりませう○面白いな僕に貸して○あたいにも

ね先生先生くくくく

○僕にシングルベルス○あたいに球投○先生此の馬は

之は手綱を引くと前に進みますよ*

*君二人で競馬やらうおいこりや面白いな○さあ皆さん少し静になさい今先生が皆に貸してあげますから

○子供は可愛いものね



幼稚園恩物類

東京 九段 フレイベル館

製造販賣 振替東京一九六四〇 電話番町二九〇九

